

福岡市埋蔵文化財調査報告書第435集

飯氏二塚古墳

1995

福岡市教育委員会

飯氏二塚古墳



遺跡略号 IJK-1

調査番号 9258

1995年3月

福岡市教育委員会



飯氏二塚古墳遠景（東より）



玄室（奥壁より）

序 文

福岡市は古来より先達の生活の場であったようで、発掘調査によって明らかになった遺跡も年ごとに数を増してきています。

ここに掲載するのは重要遺跡の確認に伴う古墳時代の墳墓についての報告です。今回調査した飯氏二塚古墳は、これまで全長40mほどの前方後円墳として知られていましたが、墳丘の形状、石室の遺存状況、埴輪・葺石の有無については未確認でした。この度の発掘によって、古墳の構造や築造の時期葬制をしめす貴重な資料を得ることができました。くびれ部から出土した須恵器は、当時の儀礼を知るうえで注目されます。ここでは、出土遺物の復元や金属器の保存処理など、そのご明らかになつた知見に、須恵器の胎土、金属器の考察などの所見を加えて報告するように努めました。分析にあたつて各方面から研究成果を寄せていただき、内容の充実をはかることができました。将来この報告書が内外の文化交流に役立つことを期待します。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたりご協力いただいた関係者のみなさまに心より御礼を申し上げます。

1995年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例 言

1. 本書は、重要遺跡の確認に伴って発掘調査した福岡市西区大字飯氏に所在する飯氏二塚古墳第一次調査の報告書である。
2. 調査は、福岡市教育委員会を主体に1992・93年度に発掘調査、1994年度に整理作業を行った。
3. 本書に使用する方位はすべて磁北である。
4. 本書の執筆分担は目次と文末に記した。
5. 道構の実測は、調査参加者で分担して行った。とくに地形測量は、九州大学考古学研究室の専攻生によるところが大である。
6. 写真撮影は、調査参加者のほか気球写真を空中写真企画に委託した。
7. 遺物の実測は、調査担当者のほか馬具を宮代栄一がおこなった。
8. 本書に使用した地図のうち(Fig.1)は、国土地理院発行の5万分の1図福岡・前原を使用した。また(Fig.2)は都市計画図をもとに作成した。
9. 出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管の予定である。
10. 本書の編集は、常松が行った。

遺跡調査番号 9258 遺跡略号 IJK-1 分布地図番号 飯氏121

調査地地籍 福岡市西区飯氏字鏡原792-2ほか8筆

調査面積 3,500m² 調査期間 1993年2月7日～6月16日

本文目次

第1章 調査の記録	
1. 調査の概要	2
2. 墳丘の構造と遺構・遺物の配置	5
石室の構造	8
葬石	10
土層	16
第2章 出土遺物	
須恵器	19
土製品	23
玉類	23
飯氏二塚古墳出土の馬具	宮代栄一 25
飯氏二塚古墳出土の須恵器の螢光X線分析	三辻利一 49
鉄鎌	53
第3章 結語	53
Summary	55

挿図目次

F i g . 1	主要前方後円墳の分布 (縮尺 1/75,000)	3
F i g . 2	飯氏二塚古墳周辺地形 (縮尺 1/3,000)	4
F i g . 3	飯氏二塚古墳周辺地形 (縮尺 1/600)	5
F i g . 4	飯氏二塚古墳現況測量図 (縮尺 1/300)	6
F i g . 5	飯氏二塚古墳トレンチ設定図 (縮尺 1/300)	7
F i g . 6	飯氏二塚古墳石室実測図 (縮尺 1/60)	9
F i g . 7	第1号トレンチ葺石検出状況 (縮尺 1/40)	10
F i g . 8	第2・4号トレンチ葺石検出状況 (縮尺 1/40)	11
F i g . 9	第6・7号トレンチ葺石検出状況 (縮尺 1/40)	12
F i g . 10	第9号トレンチ葺石検出状況 (縮尺 1/40)	13
F i g . 11	第10・11・13号トレンチ葺石検出状況 (縮尺 1/40)	14
F i g . 12	第14号トレンチ葺石検出状況 (縮尺 1/40)	15
F i g . 13	第15号トレンチ西壁土層図 (縮尺 1/60)	16
F i g . 14	第12号トレンチ北壁土層図 (縮尺 1/60)	17
F i g . 15	第5号トレンチ西壁土層図 (縮尺 1/60)	18
F i g . 16	飯氏二塚古墳出土須恵器(1) (縮尺 1/3)	20
F i g . 17	飯氏二塚古墳出土須恵器(2) (縮尺 1/3)	21
F i g . 18	飯氏二塚古墳出土須恵器(3) (縮尺 1/6)	22
F i g . 19	飯氏二塚古墳出土の土製品 (縮尺 1/2)	23
F i g . 20	飯氏二塚古墳出土の玉類 (原寸大)	24
F i g . 21	飯氏二塚古墳 (縮尺 1/2)	40
F i g . 22	1. 羽根戸E3号墳、2. 羽根戸E8号墳 (縮尺 1/2)	41
F i g . 23	1~9. 羽根戸E11号墳、10・11・12. 大塚塚1号墳 (縮尺 1/2)	42
F i g . 24	1・2. 羽根戸N8号墳、3. 大牟田1号墳、 4・5・6. 大牟田2号墳 (縮尺 1/2)	43
F i g . 25	1. 大牟田12号墳、2・3・4・5. 大牟田14号墳 (縮尺 1/2)	44
F i g . 26	1~4. 吉武塚原L-2号墳、5. L群出土古墳不明 6~9. 吉武塚原L-4号墳、10. 吉武塚原L-1号墳 (縮尺 1/2)	45
F i g . 27	柏原A2号墳 (縮尺 1/2)	46
F i g . 28	柏原A2号墳 (縮尺 1/2)	47
F i g . 29	柏原A2号墳 (縮尺 1/2)	48
F i g . 30	鉄鍼実測図 (縮尺 1/2)	53

表目次

T a b . 1	飯氏二塚古墳出土のガラス玉	23
T a b . 2	飯氏二塚古墳分析値	49
T a b . 3	クエゾノ古墳群分析値	52

図版目次

- 卷頭図版 1 飯氏二塚古墳遠景（東より）
卷頭図版 2 玄室（奥壁より）
P L. 1 後円部近景（西より）
前方部近景（西より）
P L. 2 前方部近景（東より）
前方部近景（北東より）
P L. 3 玄室（狭道部上面より）
P L. 4 玄室（東より）
玄室（西より）
P L. 5 閉塞石（玄室より）
玄門部（玄室より）
P L. 6 玄室南東部隅
玄室南西部隅
P L. 7 玄室西側壁
南側くびれ部（第1トレンチ）の掘り下げ（南より）
P L. 8 南側くびれ部（第1トレンチ）葺石検出状況（東より）
P L. 9 南側くびれ部（第1トレンチ）葺石検出状況（南より）
南側くびれ部（第1トレンチ）葺石近景（南より）
P L. 10 前方部北東隅（第9トレンチ）葺石検出状況（西より）
前方部北東隅（第9トレンチ）葺石検出状況（南より）
P L. 11 前方部南西隅（第6トレンチ）葺石検出状況（東より）
前方部南西隅（第6トレンチ）葺石検出状況（西より）
P L. 12 前方部中央部（第7トレンチ）葺石検出状況（東より）
P L. 13 北側くびれ部（第2・4トレンチ）葺石検出状況（北より）
北側くびれ部（第2・4トレンチ）葺石検出状況（南より）
P L. 14 後円部北側（第10トレンチ）葺石検出状況（北より）
後円部南西側（第14トレンチ）葺石検出状況（西より）
P L. 15 後円部西側（第13トレンチ）葺石検出状況（西より）
P L. 16 後円部西側（第11トレンチ）葺石検出状況（西より）
P L. 17 後円部西側（第12トレンチ）の掘り下げ（東より）
後円部西側（第12トレンチ）出土の甕棺（西より）
P L. 18 後円部玄室奥（第15トレンチ）の土層（南より）
P L. 19 前方部南奥壁（第5トレンチ）の上層（南より）
後円部西（第12トレンチ）の土層剥ぎ取り作業
P L. 20 南側くびれ部（第1トレンチ）甕出土状況（南より）
南側くびれ部（第1トレンチ）有蓋式脚付壺出土状況（南より）
P L. 21 出土遺物 1
P L. 22 出土遺物 2
P L. 23 出土遺物 3
P L. 24 出土遺物 4

飯氏二塚古墳の調査



玄室出土馬具（復元）

第1章 調査の記録

1. 調査の概要

飯氏二塚古墳は、高祖山から派生する標高35mの低丘陵上に位置する。今宿古墳群として総称されているが、むしろ糸島平野の東という表現が適切で、行政区として前原市にあたる怡土城内の前期の前方後円墳を含めた検討が必要であろう。

今回の調査の目的は、古墳の構造と時期を明らかにすることで、具体的には地形測量を行ない、トレンチを設定して遺構・遺物両面の所見を得ることである。

まず調査地の地番を確認し、所有者各位に説明したところ、調査の趣旨をご理解いただき承諾を得ることができた。

調査地の現況は雜木林でトラバース測量の障害になる木の伐開から開始した。地形測量の後、くびれ部からトレンチを開け、次いで前方部の隅や後円部にかけて拡張した。主体部付近に掘り鉢状の凹みがあり、振削の結果、石室の一部は遺存していることがわかった。石室の清掃と十層観察のためのトレンチの掘り下げは、土量が多く難行したが無事に調査を終えることができた。期間は、地形測量を含め約4か月であった。

またこれまで子捨塚と二塚の名称が混同して用いられていたが、子捨塚は、二塚の南東にある近接した二基の円墳をさすことを申し添えておきたい。

所有者各位

川上孝愛・川上友徳・久保 鞍・谷 義渕・谷口 登・津元通良・矢野義男
(五十音順敬称略)

調査組織

調査主体 福岡市教育委員会
調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 学
埋蔵文化財第一係長 飛高憲雄(前) 横山邦維(現)
庶務 中山昭則(前) 内野保基
調査担当 埋蔵文化財第一係 常松幹雄
調査協力 大塚紀宣・尾園 昇・岸本 圭・八丁由香・森井啓二
(九州大学文学部考古学研究室)
調査・整理参加者 有村洋一郎・池田由美・衛藤実奈子・加藤清一・小金丸ミネ子・末永 諭・
末松タツエ・末松美佐子・副田博記・曾田洋史・土谷貴志・徳安 勉・
鳥井原良治・中村昭市・波多江百合子・原美晴・平野義雄・船越恒人・
堀本慶四郎・保田清隆・真鍋キミエ・百武義隆・吉川順岳・脇坂レイコ

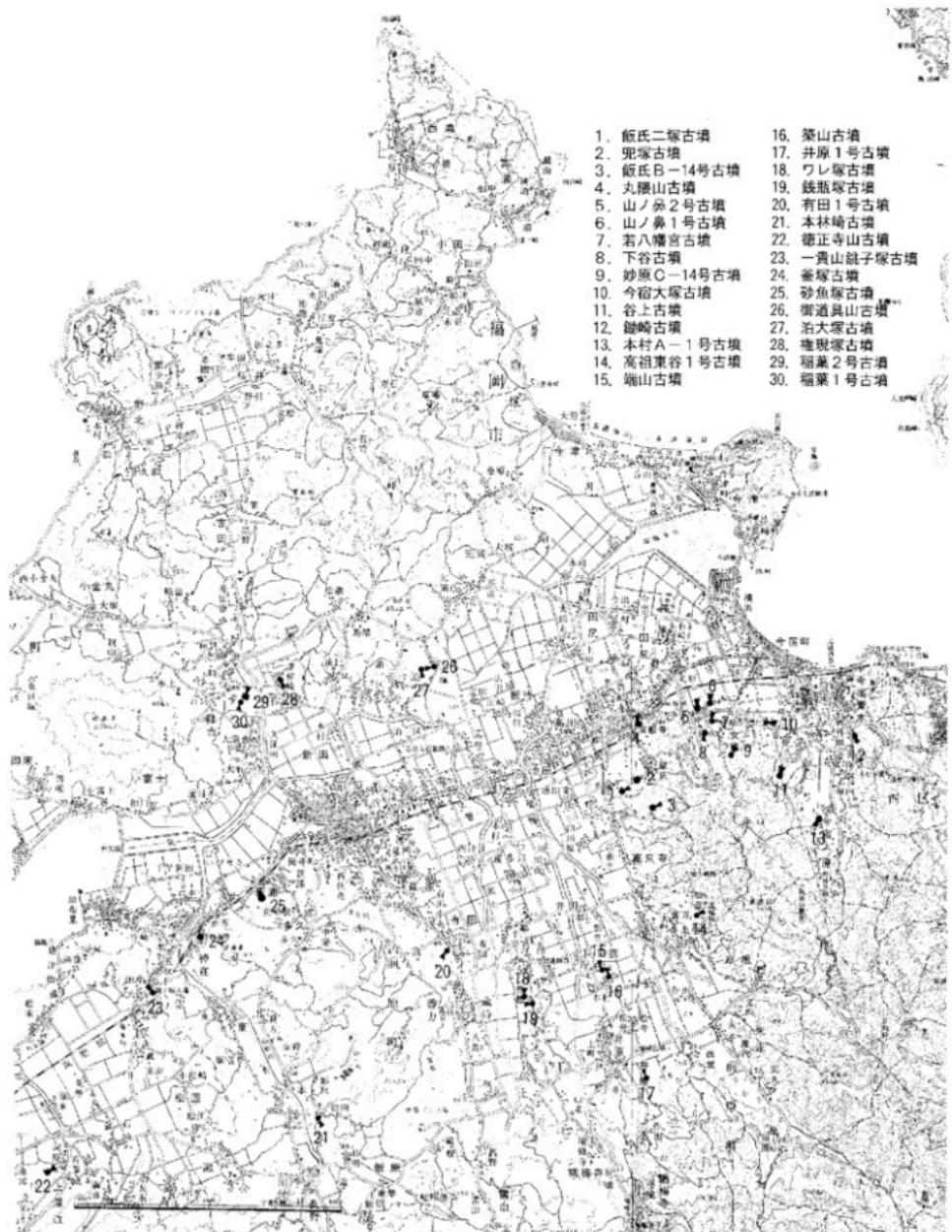


Fig. 1 主要前方後円墳の分布 1/75,000

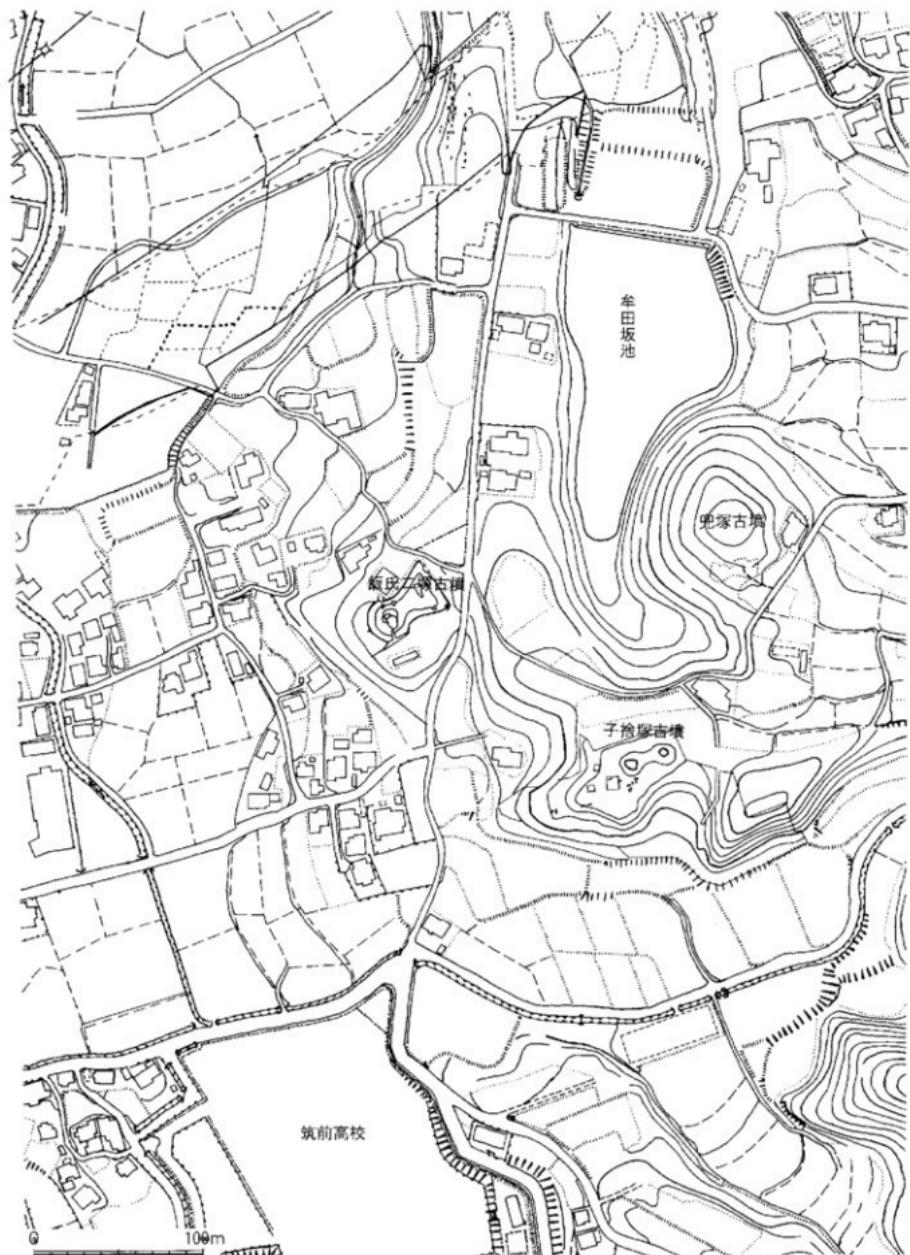
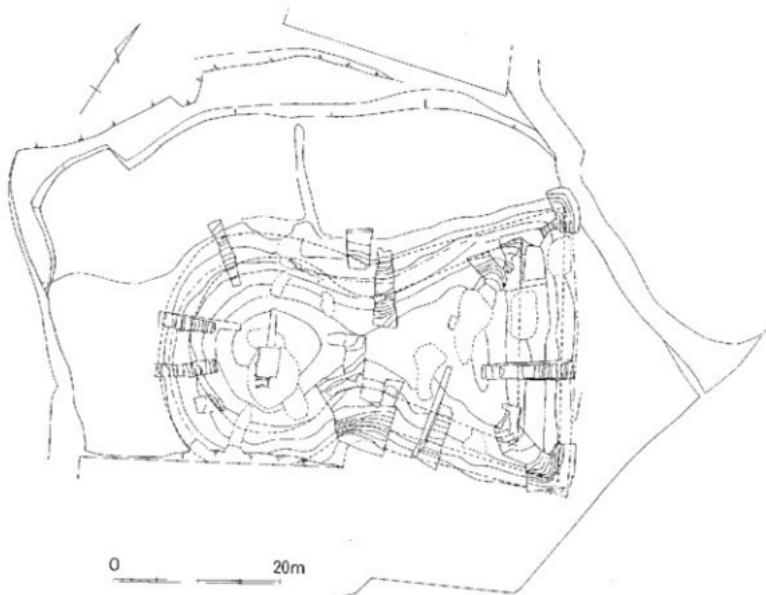


Fig. 2 版氏二塚古墳周辺地形図（縮尺 1/3,000）



発掘調査中は、津元通良氏に生活水をはじめ様々な便宜をはかっていただいた。

発掘調査ならび資料整理にあたっては福岡大学の小田富士雄氏、指導委員の渡辺正気氏、日本考古学協会員の中村 勝氏から教示を得た。記して感謝申し上げる次第である。また土層の剥ぎ取りにあたって杉山富雄氏に尽力いただいた。

2. 墳丘の構造と遺構・遺物の配置

墳丘は、前方部・後円部ともに二段築成をなし、比高差はみられない。それぞれに葺石が回るが、埴輪は確認されなかった。各部の土層観察によるとほぼ全体が盛り土である。これら盛土の中から弥生土器や大型始刃石斧が採取されており、尾根筋に立地した遺構の覆土と考えられる。戰後、墳丘の北と西側は樹齋をうけている。墳丘一段目の遺存状況がよくないのは、こうした事情を反映しているのだろう。防空壕や作物貯蔵用の穴も数箇所で認められた。以上の所見から、飯氏二塚古墳の規模は次のように捉えられる。

全長 48m程度。後円部径 23m程度。前方部幅 33m。現況の墳丘 5m程度。

主軸 N-57.5°-E。

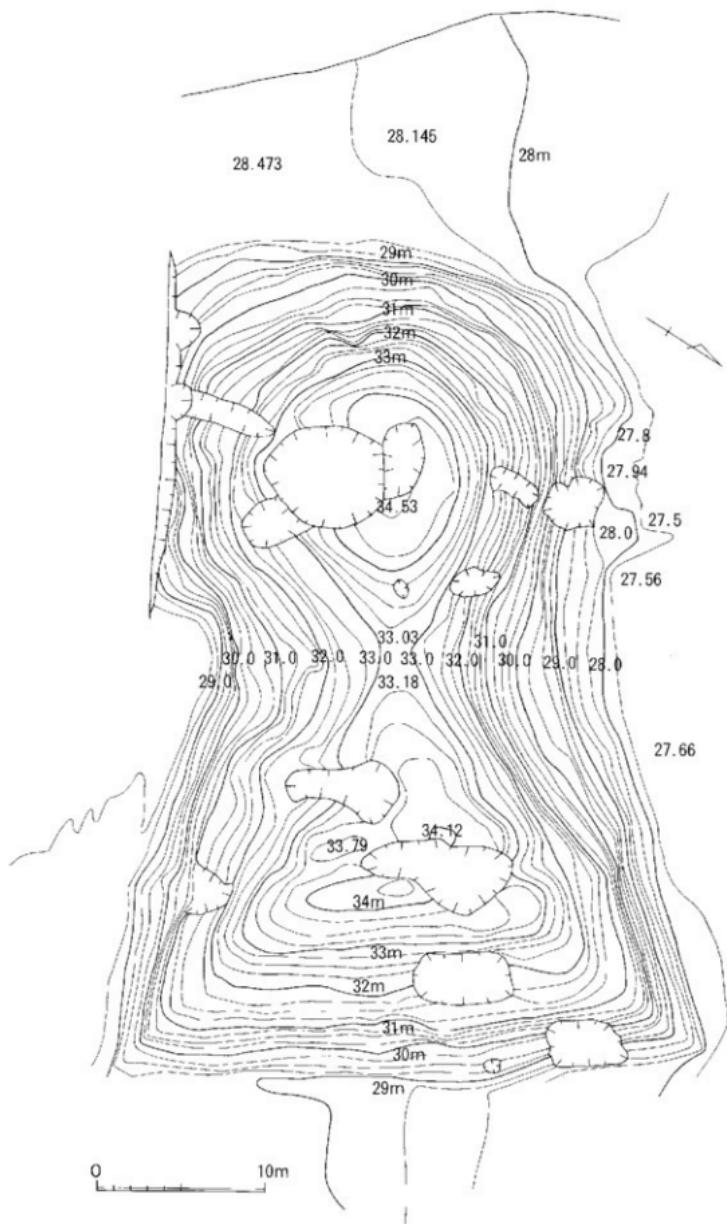


Fig. 4 飯氏二塚古墳現況測量図（縮尺 1/300）

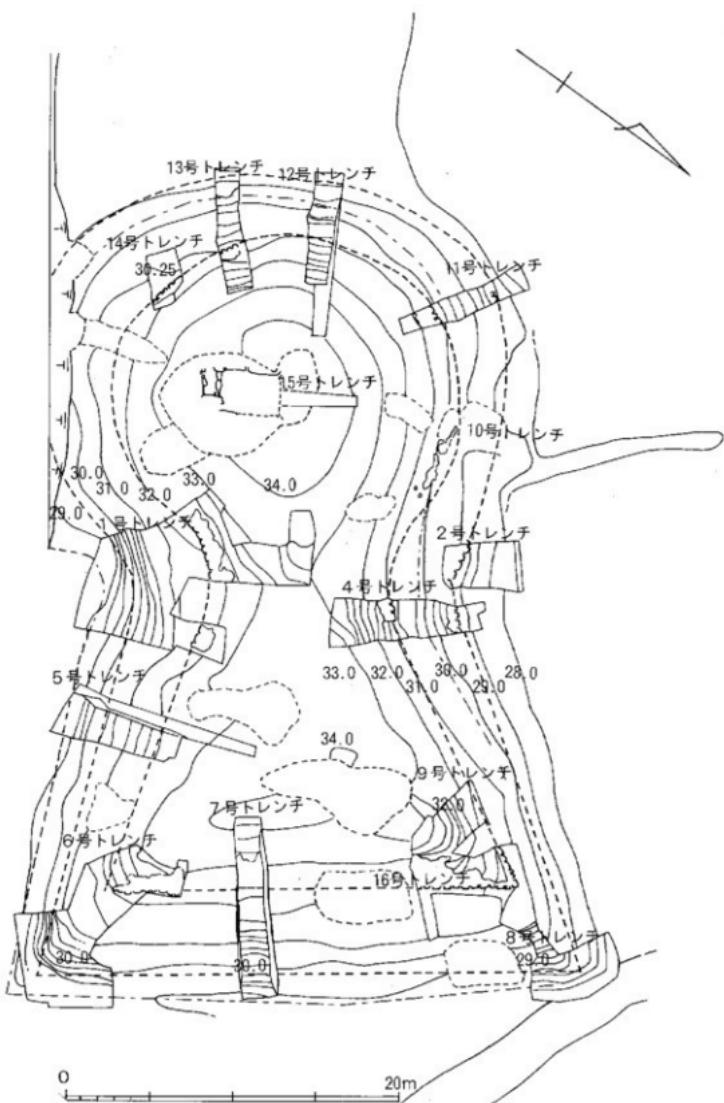


Fig. 5 飯氏二塚古墳トレンチ設定図（縮尺 1/300）

石室の構造

後円部の中央、主軸に直交する石室を確認した。花崗岩を用いた单室構造の横穴式石室で、石の多くは抜き取られ、基底部の一部を遺すのみであった。敷石さえ全く遺っていない。床面のレベルは29.5mほどで、墳丘の基底面に近い。閉塞石は、原位置を留めていたが、開口部に民家があるため墓道からの調査はできなかった。

玄室は、石の抜き跡を含めて復元すると長軸が3.5m、幅は玄門部と奥壁ともに2.3mほどの矩形を呈しており、中央部に膨らみがみられる。西側側壁は、遺りがよい。玄門部と奥壁よりに大型の石材、そのあいだに少し小ぶりの石材を用い、その隙間に小砾を充填している。

羨道部と玄室は、框石を兼ねた仕切り石によって限られており、長方体の袖石がその上に置かれている。西側の袖石は、抜かれているが、閉塞石との堆み合いから羨道は長さ100cm、高さ100cm、幅60cm程度と推定される。閉塞石の両側には石積みが確認できる。これは、内側に砾を積み上げた墓道の存在を示すものである。主軸はN-36°-E。

石室の破壊は著しかったが、該期の石室の構造として特徴的であり、系譜を含めて極めて注目すべき所見が得られた。

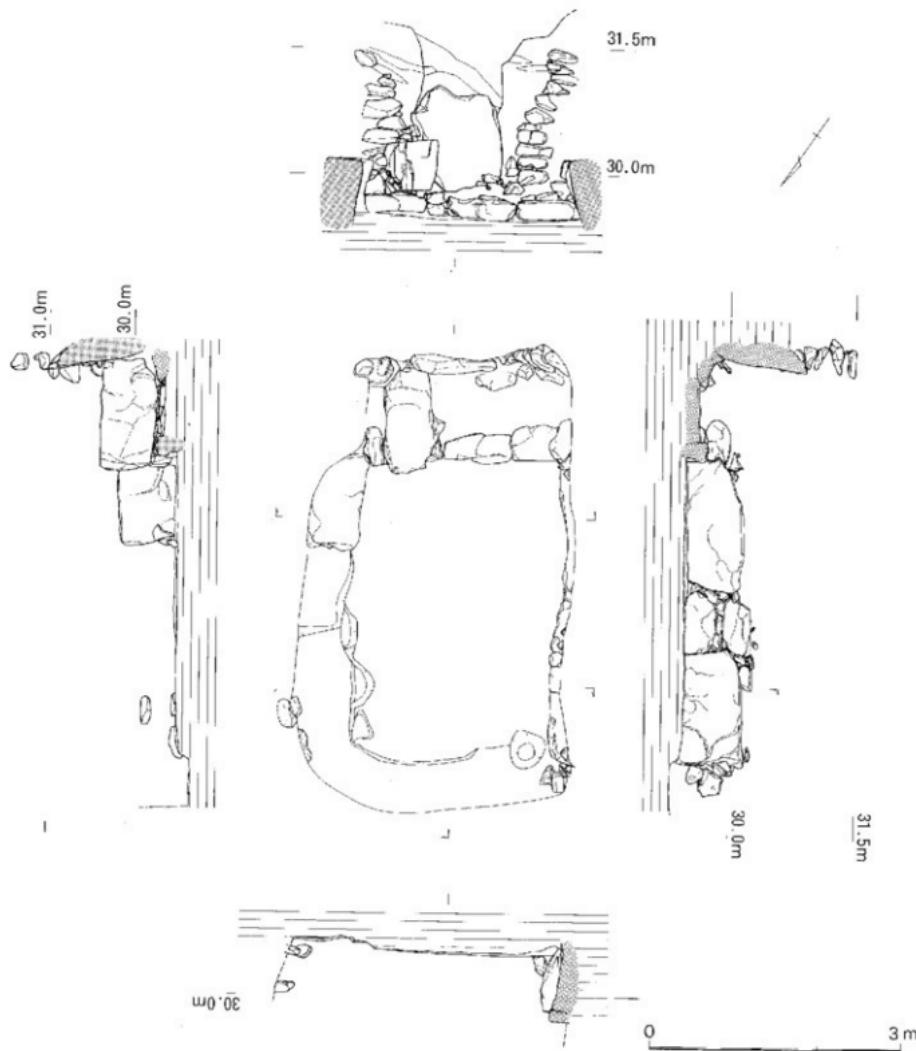


Fig. 6 飯氏二塚古墳石室実測図（縮尺1/60）

葺 石

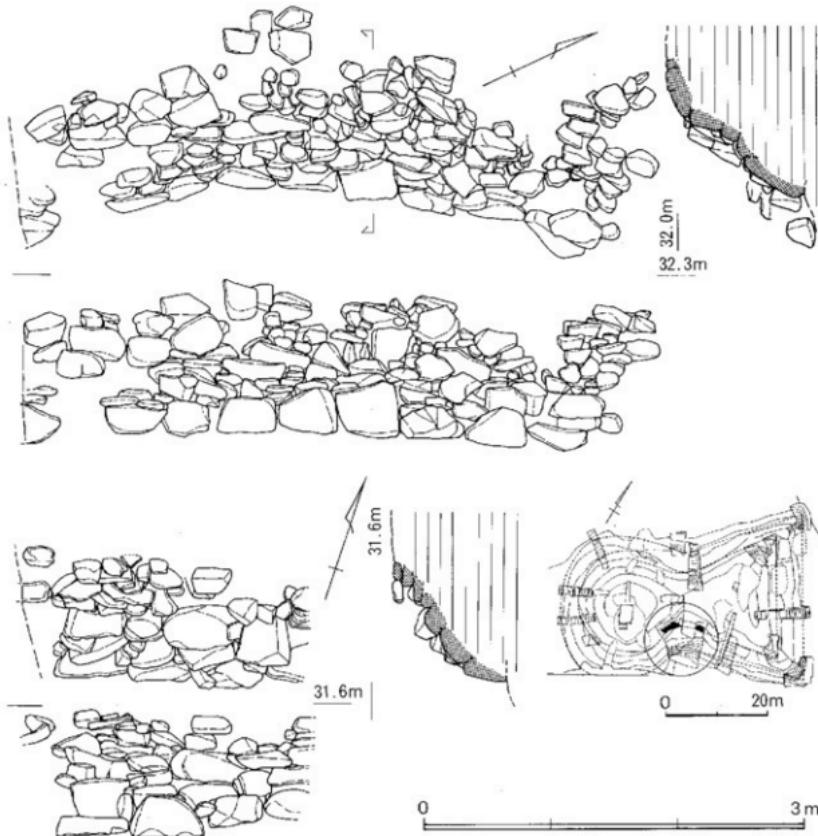
トレンチによって確認された葺石は、13箇所にのぼる。ほとんど花崗岩の自然石を用いている。

第1号トレンチ (Fig. 7)

南側くびれ部にあたる。二段目のみ遺存していた。矢印の位置でカーブを意識した積み方をとっている。

第2・4号トレンチ (Fig. 8)

北側くびれ部にあたる。一段目、二段目ともに遺存していた。一段目の葺石は開墾によって擾乱を受け、かろうじて基底部を残すのみである。4号トレンチの基部には、柱状の玄武岩を用いた箇所(矢印)がある。



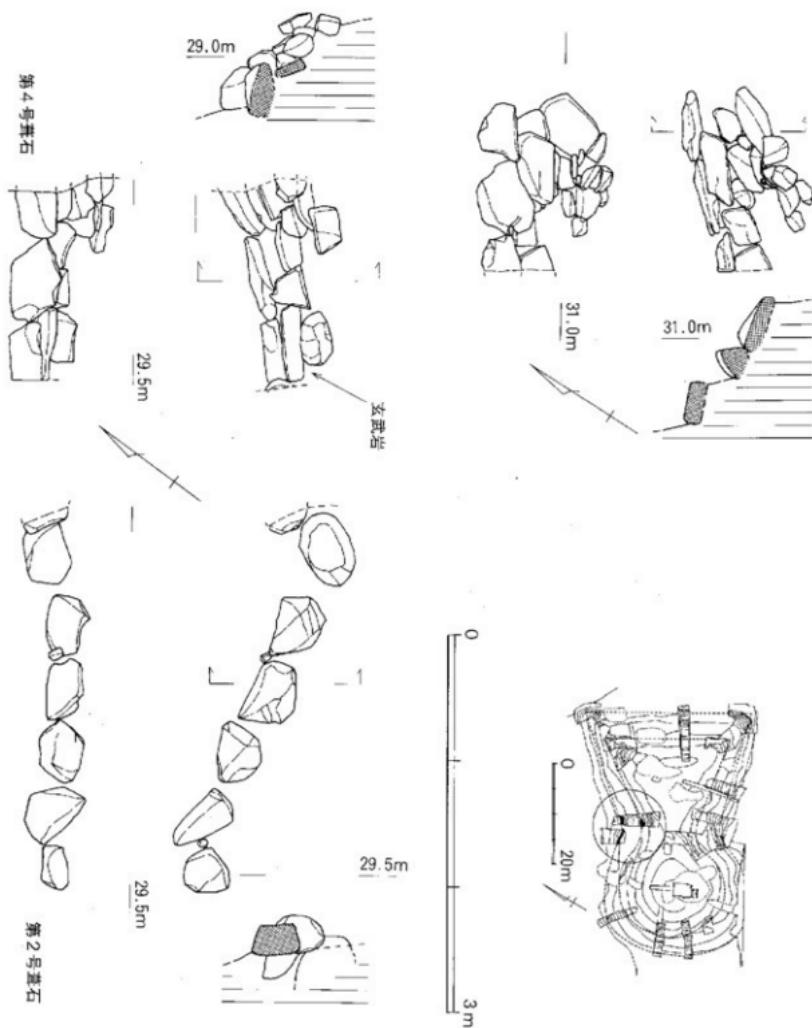


Fig. 8 第2・4号トレンチ 茎石検出状況 (縮尺1/40)

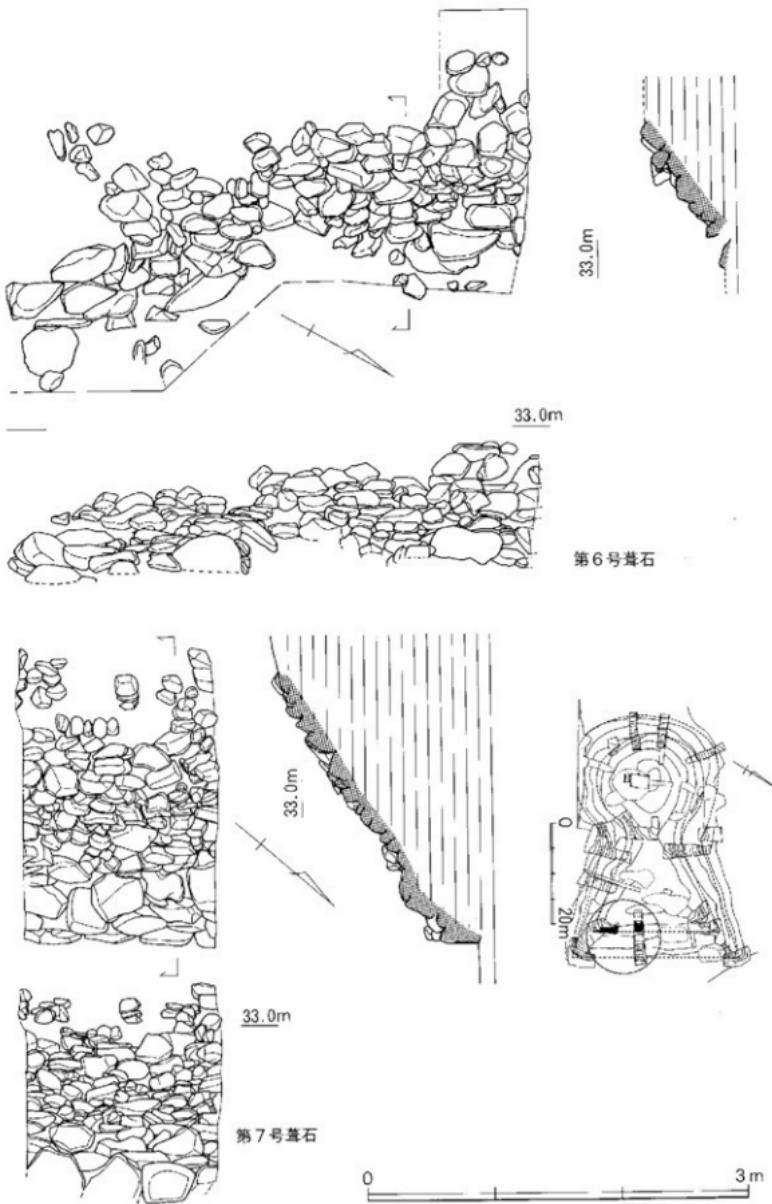


Fig. 9 第6・7号トレンチ 莠石検出状況 (縮尺1/40)

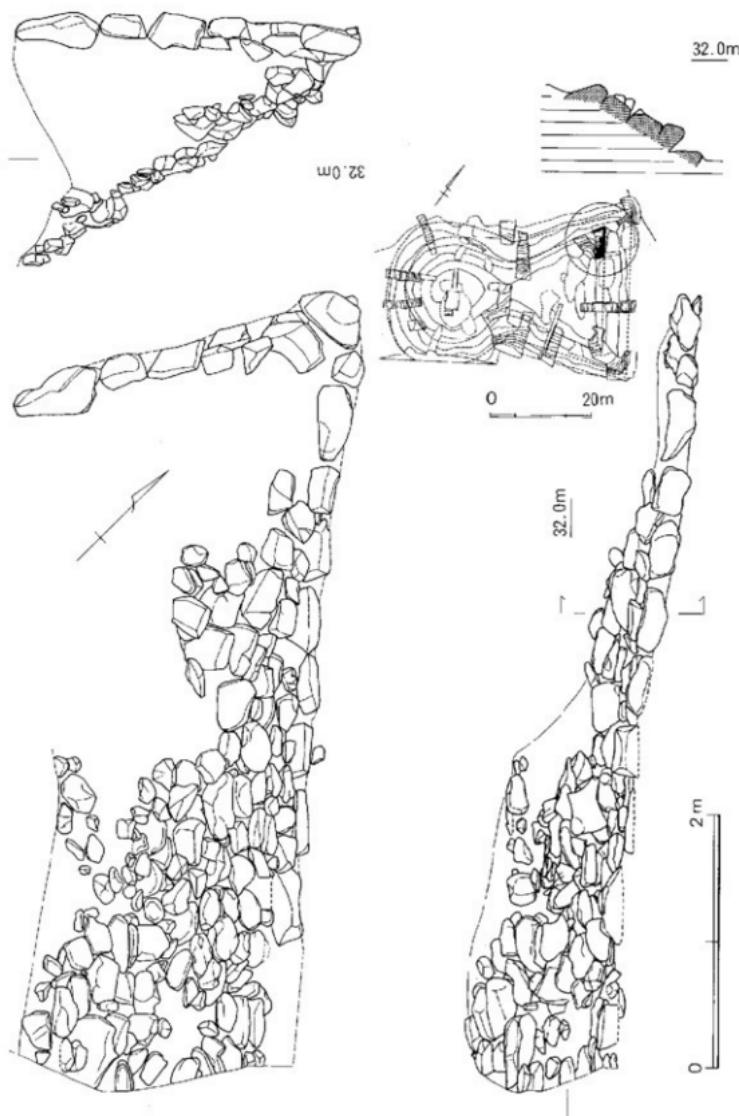


Fig. 10 第9号トレンチ 蓄石検出状況（縮尺1/40）

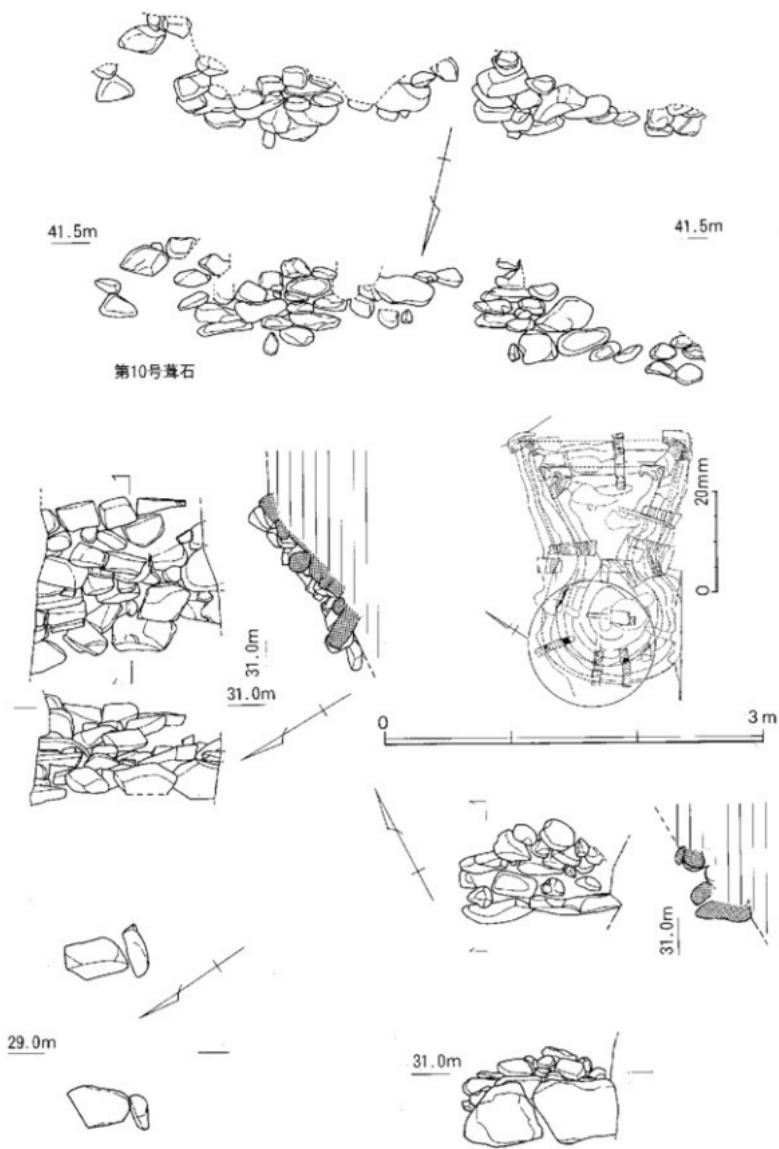


Fig. 11 第10・11・13号トレンチ 舟石検出状況 (縮尺 1/40)

第6号トレンチ (Fig. 9)

前方部南側にあたる。二段目のみ遺存していた。基底部は、隅に近い部分が東側にずれ込んでいる。南面を構成するヨーナー部分を欠く。

第7号トレンチ (Fig. 9)

前方部中央にあたる。二段目のみ遺存していた。基底部は、原位置をとどめるが、上部はかなり欠落する。

第9号トレンチ (Fig. 10)

前方部北側にあたる。二段目のみを遺存する。基底部の隅に近い部分がよく遺っている。上部は欠落が著しい。

第10号トレンチ (Fig. 11)

後円部北側にあたる。二段目のみ遺存していた。基底部の遺存状況は、不明。急斜面に露頭した部分をとりあえず図におさめた。かなり欠落している模様。

第11号トレンチ (Fig. 11)

後円部北西にあたる。一段目、二段目ともに遺存していた。一段目の葺石は開墾によって搅乱を受け、かろうじて基底部を遺すのみである。二段目の基底部は、原位置をとどめるが、上部は欠落が著しい。

第13号トレンチ (Fig. 11)

後円部西側の二段目の基底部にあたる。上部は欠落が著しい。

第14号トレンチ (Fig. 12)

後円部南西部の二段目の基底部にあたる。上部は欠落が著しい。

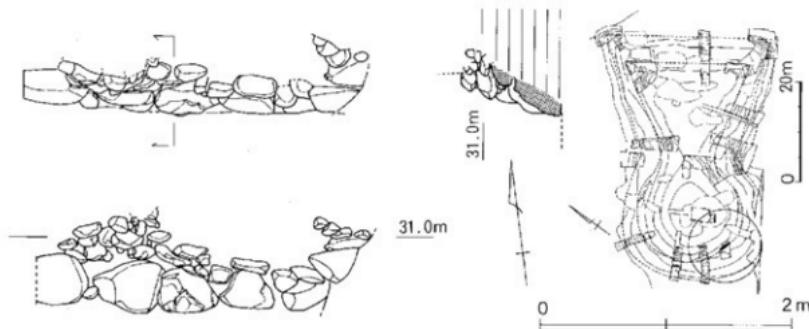


Fig. 12 第14号トレンチ 補石検出状況 (縮尺1/40)

土層

前方部と後円部で各一箇所、葺石の遺っていないトレンチを地山まで掘り下げた。さらに石室奥壁に土層観察のトレンチを追加した。

第5号トレンチ (Fig. 15)

前方部南側にあたる。地表から1mから1.8mにわたって搅乱を受けており、花崗岩が風化した地山を削りだした基盤に褐色や黒色の土を突き固める。上部の遺りが悪く、築造過程をしめす最適な土層とはいいがたい。

第12号トレンチ (Fig. 14)

後円部西側に設定した。花崗岩が風化した地山を削りだした基盤に褐色や黒色の土を突き固める。土層観察から、地業は三期で捉えられる。

第一期・・・・・・細かい縞状の堆積を基盤とする。周辺から土を寄せ集めた粗い整地といった印象を受ける。.

第二期・・・・・・褐色や黒色の土を交互に突き固めたもの。

第三期・・・・・・赤褐色土を用いて墳丘の表面を赤い色で仕上げる。

第15号トレンチ (Fig. 13)

石室の奥壁を幅60cmにわたって掘り進めたもの。基本的に第12号トレンチの観察結果を追認するものであるが、根による搅乱が少なく、遺存度がよい。

以上、奥壁の観察から後円部の4.5mの墳丘は、すべて盛土によるもので、最上部に赤味がかった色の土を用いることにより、葺石の白色との対比を意図したモニュメントであったことがうかがえる。また二期と三期の間に腐食土層がみられるが、埋葬時に赤褐色土を用いて墳丘の表面を赤い色で仕上げたと解釈するなら、その層に墳丘の築造から埋葬までの時間の経過を見込むことができよう。

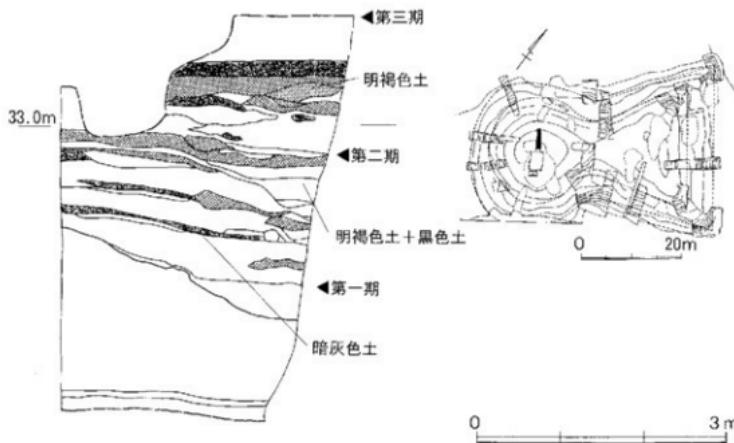


Fig. 13 第15号トレンチ 西壁土層図 (縮尺1/60)

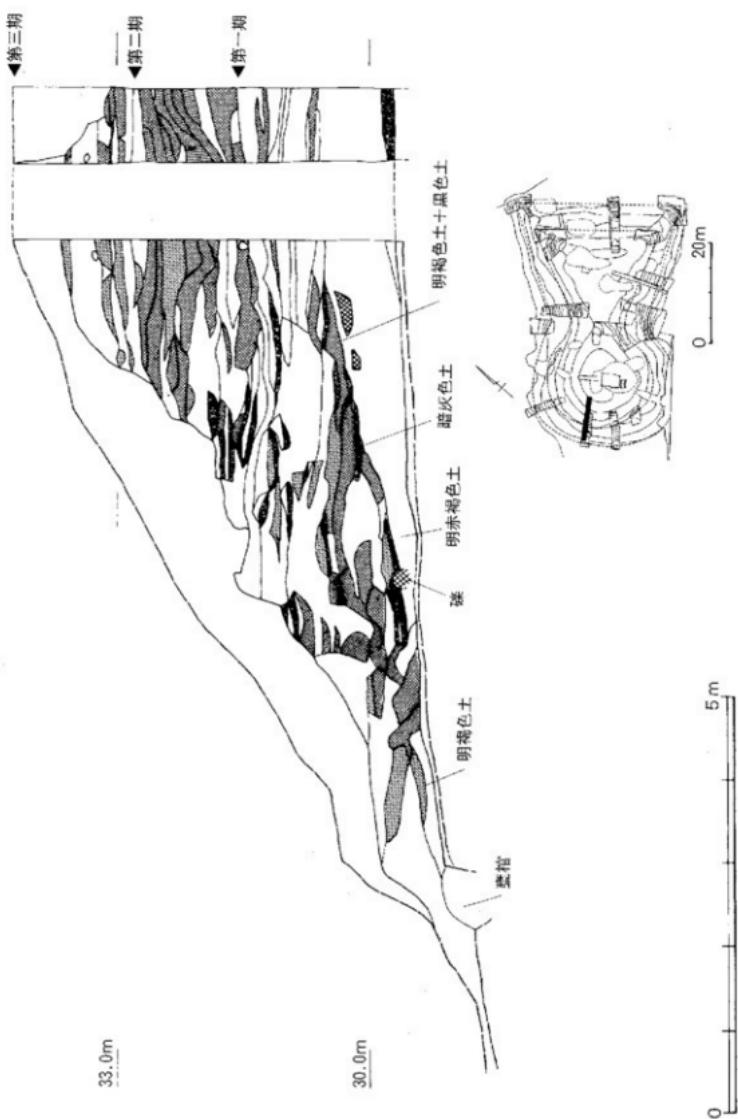


Fig. 14 第12号トレンチ 北壁土層図（縮尺1/60）

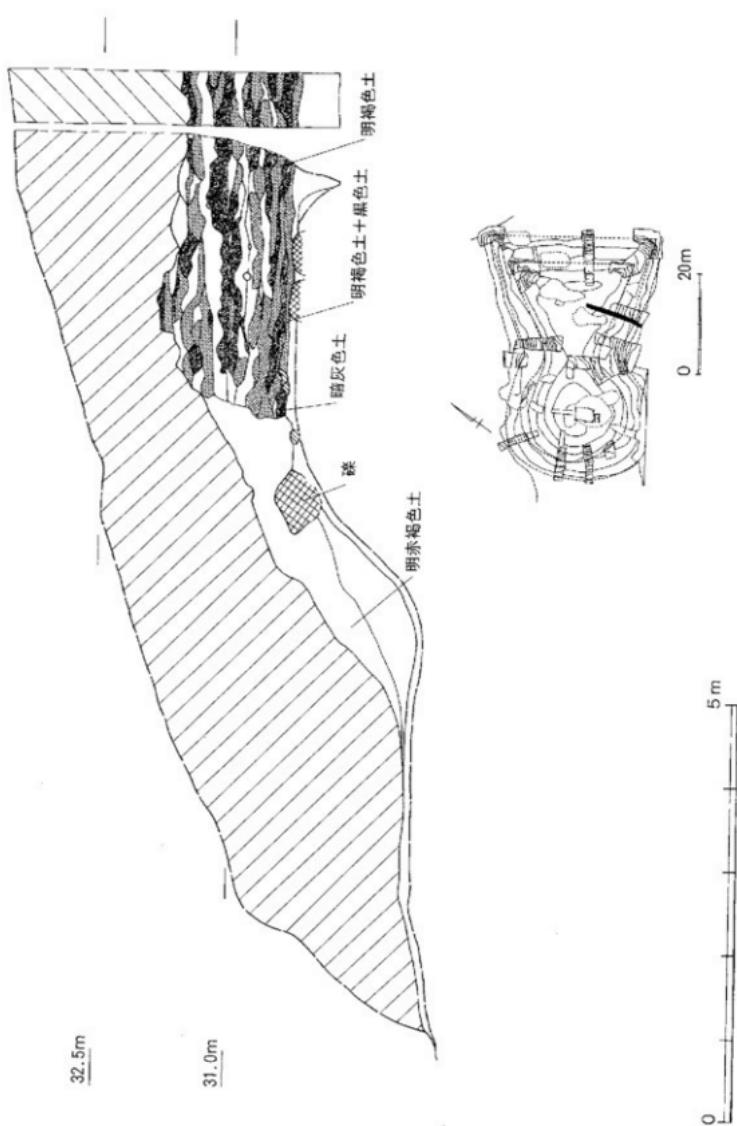


Fig. 15 第5号トレンチ 西壁土層図 (縮尺1/60)

第2章 出土遺物

馬具類とガラス玉は石室内で、須恵器はすべてくびれ部で検出された。分布は圧倒的に南側のT-1に集中していた。また出土位置は、蓋石から浮いていた。

須恵器

001. は、蓋杯あるいは有蓋高杯の蓋部である。全周の1/5を存し、復元口径16.0cmをはかる。口縁端部は段をなし、稜は明瞭で、天井部は回転による削り痕がみられる。青灰色を呈す。今回出土した他の蓋はすべて有蓋高杯のものであり、口縁端部に明瞭な段はみられない。

002. は、脚付壺の蓋部で、003.とセットである。口径12.8cm、高さ4.4cmをはかる。口縁端部に段を有する。天井部のやや下から口縁部外面にかけて自然釉を付す。つまみ中央部は凹み、上面は平坦である。

003. は、有蓋式脚付壺である。口径10.9cmで、高さ28.2cmをはかる。口縁端部に段を有し、頸部に櫛描波状紋を回らす。胴部は、叩き成形ののち、カキ目調整を加える。底部に成形時の接合痕がみられる。脚部には櫛描波状紋を回らしたのち、三角形の透しを四方から切り込んでいる。肩部と脚部に自然釉を付す。

004. の題は、ほぼ完形で、口径12.5cm、高さ14.1cmをはかる。頸部と胴部に細かい単位の櫛描波状紋をめぐらす。胴部過半から底部にかけてはヘラ削りの後などで加える。黒灰色を呈し、胎土は、木目が粗く軟質である。

005. は、器台あるいは脚付壺の脚部である。小片から復元した。櫛描波状紋を回らしたのち、四段にわたって三角形の透しを切り込んでおり、透しは上から4・5・7・8程度であろう。器部または壺の内面に当て具の痕跡がある。

006. から015. は、有蓋高杯である。厳密なセット関係はわからないが、噛み合いの良いもの同士を割りふった。全体の傾向としていえることは、高杯に焼成時の歪みが著しいことで、これは蓋の外間にみられる痕跡から重ね焼きの際にかかった重みによるものである。色調は、一様に黄味を帯びた灰色を呈し、胎土の質感も同様である。

006. は、口径16.0cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみを欠く。天井部に径8.8cmの重ね焼きの跡がみられる。

007. は、天井部から稜部にかけての破片である。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって凹む。天井部に径12.5cmの重ね焼きの跡がみられる。

008. は、口径16.7cm、高さ6.1cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、頂部が平坦である。

009. は、口径16.2cm、高さ6.6cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって凹む。

010. は、口縁端部を欠くが、復元すると、口径14.0cm、高さ14.8cm程度である。脚の上部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部は屈曲して終わる。裾部の径10.8cmをはかる。

011. は、口径14.0cm、高さは、焼き歪みが著しいが、15.2cmから16.5cmをはかる。脚の上部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部は屈曲して終わる。裾部の径10.9cmをはかる。

012. は、口径16.0cm、高さ6.2cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって凹む。天井部に径11.4cmの重ね焼きの跡がみられる。

013.は、口径17.0cm、高さ6.9cmをはかる。口縁端部は直線的で段をなさない。天井部にカキ目を加える。つまみは、中央部に向かって回む。天井部に径8.0cmの重ね焼きの跡がみられる。全体の3/4を存す。

014.は、口径15.0cm、高さは、焼き歪みが著しいが、12.7cmから15.3cmをはかる。杯部下半と脚の筒部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部はよく屈曲して終わる。裾部の径10.8cmをはかる。

015.は、口径15.0cm、高さは、焼き歪みが著しいが、14.0cmから17.2cmをはかる。杯部下半と脚の筒部にカキ目を施し、三箇所に透しを切り込む。裾部は端部が面をなして終わる。裾部の径10.6cmをはかる。

016.は、人甕の口頭部である。復元口径46.0cmをはかる。北側のくびれ部で出土した。口縁下に一条と二条の突帯を付し、その間に細かい単位の櫛梳波状紋を回らしている。暗灰色を呈する。

017.の人甕は、口縁部から胴部と胴部下半に分かれている。図上で復元すると高さは107.4cmになる。口頭部を突帯と沈線によって三分割し、カキ目を施したのちヘラの先端状の工具によって波状紋を回らす。胴部外面に平行叩きによる成形を行ない、内面に当て具の痕が全面にみられる。016.にくらべ突帯は、シャープさを欠き、波状紋も簡略化の傾向が伺える。

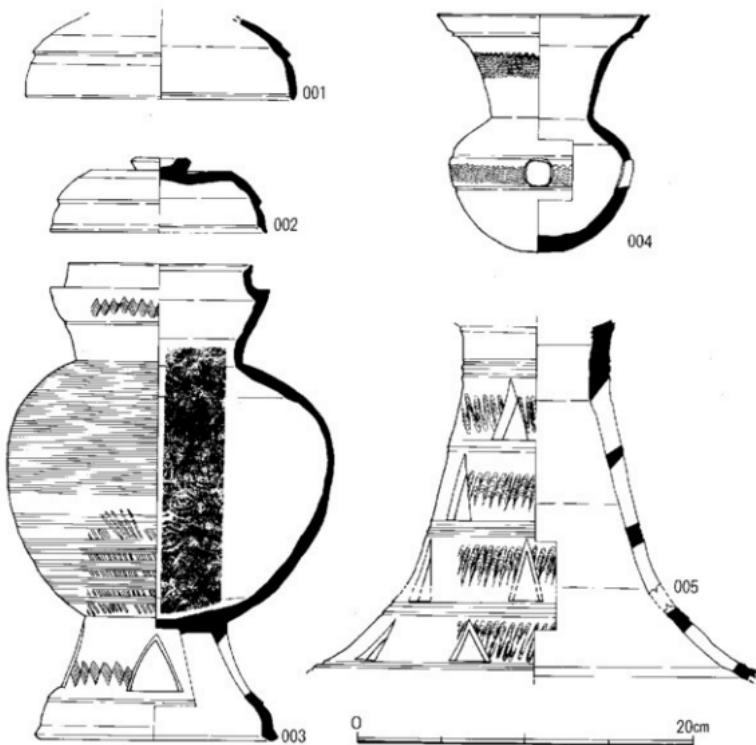


Fig. 16 飯氏二塚古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

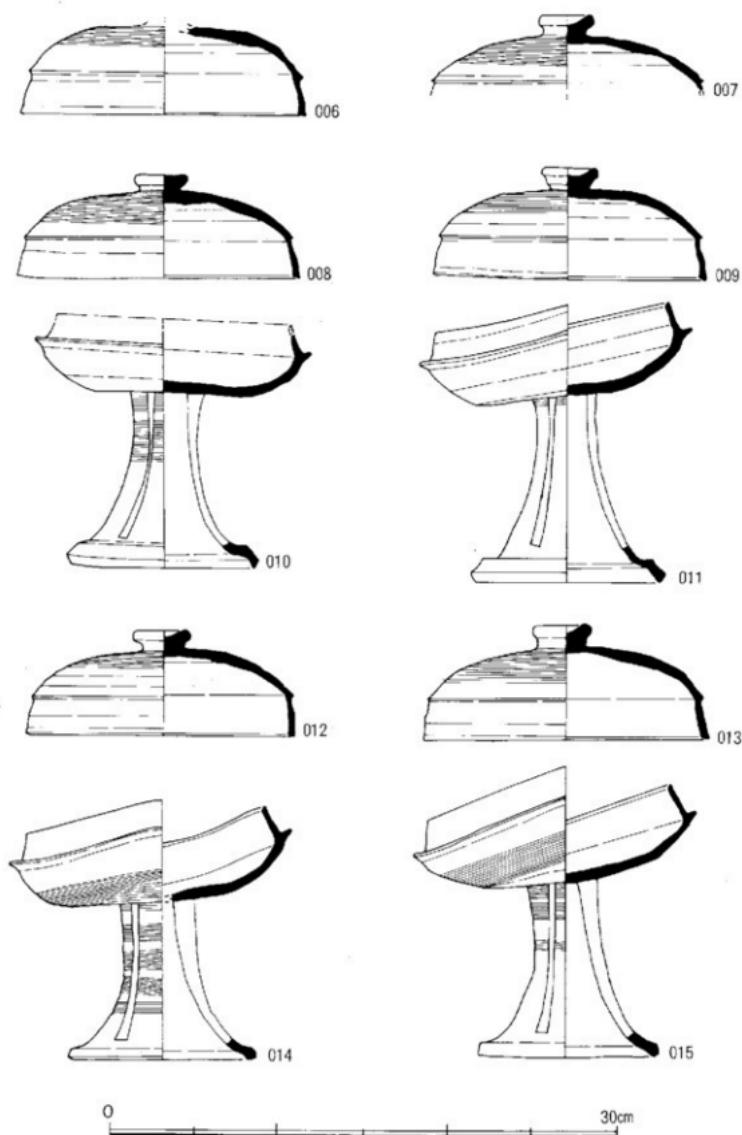


Fig. 17 飯氏二塚古墳出土須惠器(2) (縮尺1/3)

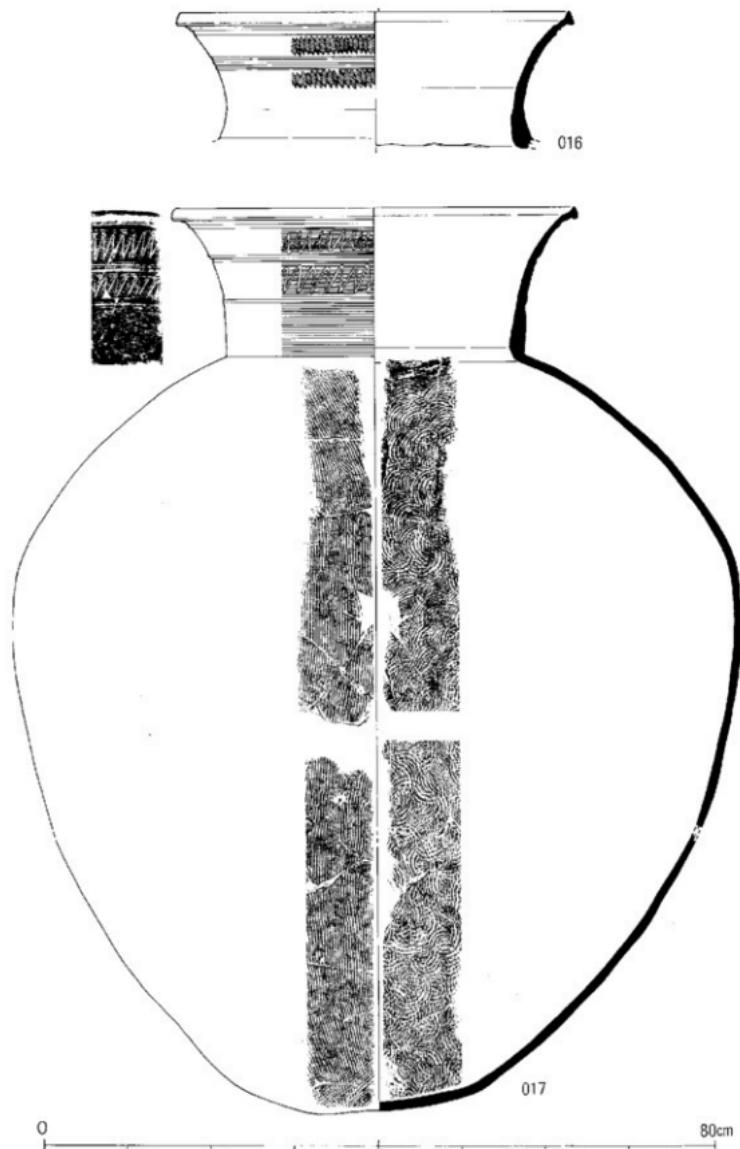


Fig. 18 飯氏二塚古墳出土須恵器実測図(3) (縮尺1/6)

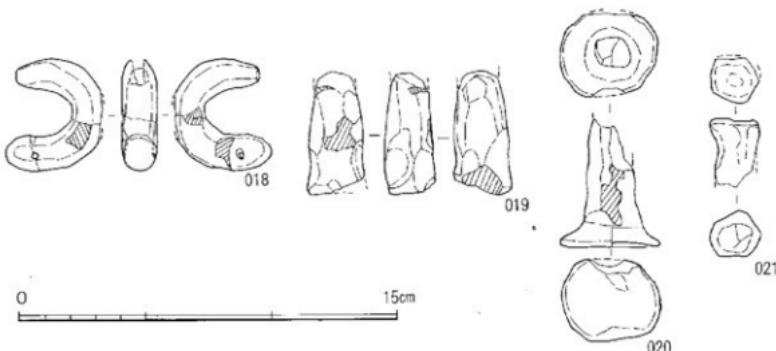


Fig. 19 瓢氏二塚古墳出土の土製品（縮尺1/2）

土製品

018.の土製勾玉は、第12トレンチの第Ⅱ期、褐色や黒色の土が交互に突き固められた層から出土した。全長4.3cm、厚さ1.4cmをはかる。

019.の土製品は、肝心の部分が欠失しており器種の特定はできない。

020.は、ミニチュアの器台と思われる。受け部を欠く。現存高5.0cm。

021.は、細片であるため器種の特定はできない。

019.以下は、出土地点不明。

玉類

ガラス玉のほとんどは石室の床面の土を洗浄して確認された。42が緑透色を呈する以外は、すべて紫紺色を呈する。径1cm前後で大粒の玉と5、6mmのものとに二分される。

瓢氏二塚古墳出土ガラス玉

遺物番号	直徑	長さ	遺物番号	長径	長さ	遺物番号	直徑	長さ
101	10.9	9.9	116	6.0	4.3	131	5.0	4.3
102	10.7	9.1	117	6.1	4.8	132	5.4	4.3
103	9.3	10.1	118	6.2	4.2	133	5.3	4.5
104	5.6	5.3	119	6.1	4.6	134	5.5	4.0
105	5.9	4.9	120	6.1	4.6	135	5.5	4.0
106	6.0	4.5	121	6.0	4.2	136	5.5	3.6
107	6.0	5.0	122	6.3	4.6	137	5.5	4.0
108	5.9	4.7	123	5.9	4.5	138	5.0	3.6
109	5.9	4.5	124	6.1	4.0	139	5.7	3.6
110	5.8	4.5	125	5.8	4.6	140	5.5	3.6
111	5.9	5.1	126	5.3	4.6	141	—	—
112	5.8	4.6	127	4.9	4.7	142	—	—
113	5.6	5.4	128	5.3	4.2			
114	5.9	4.9	129	5.2	4.3			
115	6.2	4.1	130	5.3	4.7			

単位mm

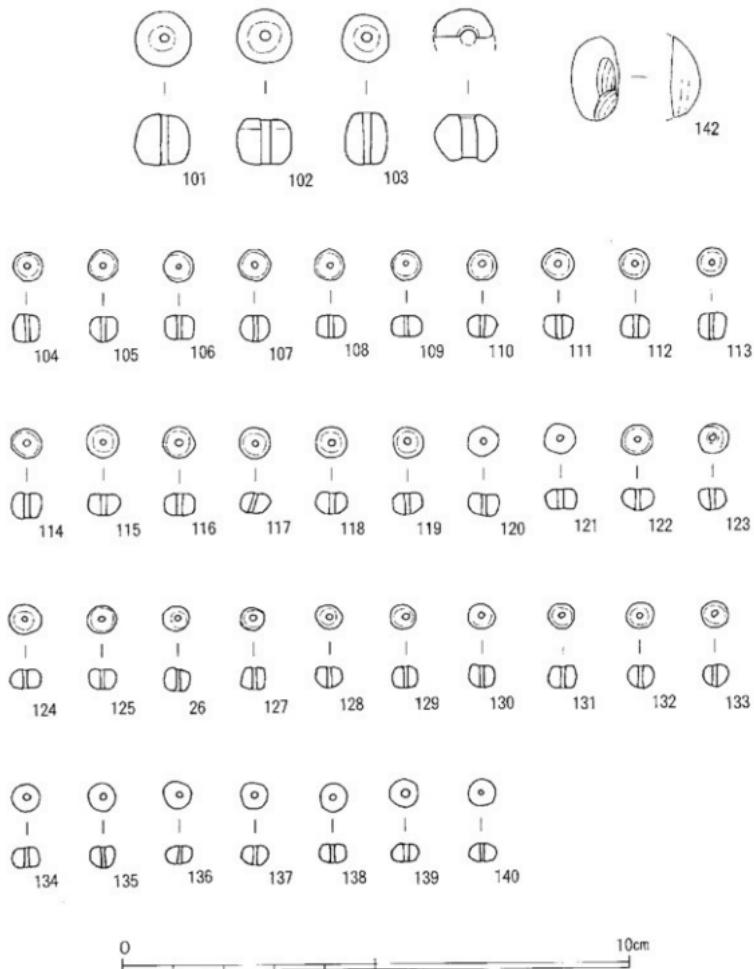


Fig. 20 飯氏二塚古墳出土の玉類（原寸大）

飯氏二塚古墳出土の馬具

宮代 栄一

飯氏二塚古墳からは方形の雲珠辻金具の脚の破片が計17点出土している(1図)。これらは大型のものとやや小型のものに大別することができ、さらにこれらに伴うと考えられる資金具が7点、遊離した形で見つかっている。このほか環状雲珠ないし環状鏡板付轡の破片と思われるもの1点が確認されている。

脚の破片は環を中心に方形や半円形の金具を配する「環状雲珠辻金具」に伴うものとみて間違いない。轡大型の雲珠辻金具の破片はいずれも一边の長さが約2・5cmの正方形で、鉄地金銅張。7点が確認されている。表面に直径約5ミリの鉄地銀張の紙を5個ずつ打つ。裏面に革と思われる有機質が残っているものがあり、紙の脚はこの皮革を貫いたのち、裏側からたたいて留められている。紙脚の長さや皮革の残り具合からみて、この繩(がい=馬の飾りベルトのこと)に用いたと考えられる帶状の有機質の厚さは4ミリ前後であったと想定される。

これらの脚部を留める補助的役割を果たしたと考えられる、細長いひも状の資金具は、幅3・3cm、たて幅0・4cmほどで、表面に細かい刻み目を施す。さびが著しく確認できなかったが、紙と同様に鉄地銀張である可能性が高い。刻み目と同じ方向にそろえるものとそろえないものの2通りの組み合わせが確認されている。表面に5紙を打つものとしては、一边の長さがやや小さめの2・2cm前後を測るものも2点出土している。つくりなどは前述のものとほぼ同巧だが、紙打ちの間隔もやや密になっており、おそらく前述の大型の脚の破片とはやや異なる用途に用いられていた可能性が高い。

以上のものとは別に小型の脚の破片が8点出土している。正方形で、一边の長さは2・1cmから2・2cm。やはり鉄地金銅張だが、大型のものの破片に比べて全体に薄めにつくっているのが特徴である。表面には四隅に近い場所に鉄地銀張の4紙を打つ。これらに伴うと考えられる資金具はいずれも遊離しているが、いずれも大型のものより幅がやや狭い。資金具も意識して使いわけをしていたようだ。

これらのほかに厚さ5ミリ、長さ2・4cmの内側にカーブを描く鉄製品が1点出土している。復元すると直径6cm前後の環状をなすと考えられ、環状鏡板付轡の鏡板である可能性は捨て切れないものの、本墳の場合は環状雲珠の破片と考えてもよいのではないか。

復元図を1図の下段に示した。小型の脚は小さめの辻金具に、大型の脚は大きな雲珠に用いられた可能性が高い。このような組み合わせを持つ環状雲珠辻金具の型式としては、埼玉県稻荷山古墳例をあげることができ、それに基づき、脚数は6脚として復元した。ただし脚は環の周囲に6点だけ配されたわけではなく、その6点の延長上にも連続して複数とりつけられていたものとみられる。筆者が以前に別稿(宮代1993)で述べた通り、このような環状雲珠辻金具の使用は5世紀第2四半期の滋賀県新開古墳南造構にはじまり、MT85型式期の京都府物集車塚古墳まで続く。ただし脚の形が方形を呈するものは、半円形を呈するものよりやや時期が下がり、TK208型式期以降という年代が考えられよう。よって本古墳出土の馬具から導きだされる時期はTK208型式~MT85型式期ということになる。しかし雲珠に用いられたと考えられる脚がやや大型化していることを勘案すると、MT15型式期~MT85型式期の年代、実年代にして6世紀前半から中頃あたりを想定しておくのが妥当であろう。

筆者の以上のような推定が仮に正しいとすれば、本墳からは雲珠辻金具にかかわる以外の馬具は1

点も出土していないことになる。このことに関しては、空掘された可能性があると同時に雲珠辻金具以外の馬具が最初から一切副葬されていなかった可能性も示唆している。たとえば埼玉県目沼9号墳（杉戸町1981）では、木棺直葬の主体部から環状雲珠のみが出土している。さらに滋賀県大通寺古墳群や佐賀県猿猴A遺跡S T 0 0 6（蒲原1980）では、環状雲珠と剣菱形杏葉だけを副葬した例が確認されている。これらには当初から馬の尻繋にかかわる部分を副葬しようという明らかな意志がみてとることができ、本墳の場合にも同様のことといえるのかもしれない。

福岡市出土の馬具

この章では前項に関連するものとして、福岡市内から出土した馬具の集成を行った。福岡県内では現在240基強の古墳で馬具の副葬が知られているが、そのうち福岡市内が後述するよう47基を占める。この数字は九州では大分県や長崎県の全県から出土した馬具の数を凌駕し、熊本県や宮崎県と肩を並べるもので、市内の古墳の総数を考えあわせても、かなり多い数字ということができよう。以下、詳細を記したい。なお紙面の関係から図版の一部しか掲載し得なかつたことをお断りしておく。

丸尾2号墳（大庭・力武1985） 福岡市博多区席田字丸尾

直径1.1～1.4mの円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1、木芯鉄板張三角錐形壺蓋の兵庫鎖1が出土した。環状鏡板付轡は左側壁の奥近くから、兵庫鎖は羨道部の右側の石の間から見つかった。

環状鏡板付轡は梢凹形の素環状鏡板を伴う型式で、幅6・7cm、高さ6・1cm。単連の兵庫鎖を連結して立間の機能を果たしている。引手と衡は一ヵ所で連結される。引手は長さ1.5・3cmで、引手は先端を曲げない「直引手」である。岡安光彦氏の編年（岡安1984）でいうところのTK4.3型式～TK2.0.9型式期に相当するものであろう。

兵庫鎖は本来2点で1組となるものだが、1点しか見つかっていない。鉤具、三連の兵庫鎖、壺部を覆う舌状金具の3つの部分から構成され、兵庫鎖の長さはそれぞれ7・6cm、7・8cm、7・7cmを測る。舌状金具は先端を欠いており、全長は分からぬ。栗林誠治氏の編年（栗林1992）によれば、このような数値は岡山県中宮1号墳出土例、埼玉県黒田1号墳（花園町1975）出土例などに近く、TK4.3型式期の年代が与えられよう。

堤ヶ浦5号墳（吉留1987） 福岡市博多区大字金隈字堤ヶ浦

直径1.3・5mの円墳。複室構造の横穴式石室から轡1が出土している。

轡はその大半を欠いているが、二連衡の鉢轡と想定され、引手の長さ1.6・5cmを測る。墓道内の埋土から出土した。衡は馬の口中に入る「くくみの輪」の部分をやや大きめに造っており、幅3cm、長さ2・5cmを測る。TK2.1.7型式期に比定される。

堤ヶ浦6号墳（吉留1987） 福岡市博多区金隈字堤ヶ浦

直径約1.2mの円墳。横穴式石室から引手の破片1、轡1、鉤具1、衡の破片1が出土した。轡は輪金の部分のみで、長さ6・7cm、最大幅4・6cmを測る。このように輪金の左右が張り出す轡はMT8.5型式期に出現し、TK2.1.7型式期まで用いられた。法量などからTK2.0.9型式期～TK2.1.7型式期を中心とする鉤具は輪金の最大幅4・4cm、残存長4・6cmを測る。馬具はいずれも墳丘南側斜面からの出土である。

堤ヶ浦7号墳（吉留1987） 福岡市博多区金隈字堤ヶ浦

直径約1.2mの円墳。横穴式石室から耳環、小玉、刀などと共に、石室の前部から環状鏡板付轡1が出土した。環状鏡板付轡は鉸具状に造った立轡を持つもので、一部破損しているが、幅5・9cm、高さ7cm弱を測る。引手と衡は鏡板を介さずに連結され、引手の長さは14・5cmである。TK217型式期の年代が与えられる。

重留A-1号墳 福岡市早良区大字重留字後谷（下條ほか1984）

古墳だが、墳形など不明。横穴式石室から轡1、飾金具1、飾金具1が出土した。轡は鏡板の一部を失するが、復元高約7・5cm、幅7・6cmを測る大形矩形立轡環状鏡板付轡で、衡と引手は遊環を介して連結される方式である。引手は長さ1.8cm。先端部を曲げる端部屈曲引手で、おそらくTK217型式期のものであろう。飾金具は鉄地金銅張で、方形に4筋を打つ型式である。一辺の長さ約3cmを測る。法量などからTK209型式期以降の年代が与えられる。

新立表2号墳 福岡市博多区東平尾（大庭・力武1990）

円墳。横穴式石室から鉄製の鏡板付轡1が出土している。残存部などから考えて、鉄製の楕円形鏡板付轡と思われ、残っている鏡板の幅約7cmを測る。引手と衡は遊環を介して鏡板の外側で連結されていたと考えられる。引手は先端部を曲げる、長さ1.2cmの端部屈曲引手である。連結法などからMT15型式期の年代が考えられる。

小松ヶ丘1号墳（福岡市1971） 福岡市早良区野方大音

直径1.2mの円墳。横穴式石室から金環、須恵器、土師器、などと共に馬具が出土した。1970年、福岡市教育委員会の委託によって鈴木重治氏が16基を調査したという。未報告のため、詳細は分からぬ。

小松ヶ丘7号墳（福岡市1971） 福岡市早良区野方大音

直径1.6mの円墳。横穴式石室から銀環、須恵器、土師器と共に馬具が出土したという。

山崎C1号墳（漬石1994） 福岡市早良区野芥5丁目

円墳。横穴式石室から轡1が出土した。轡は高さ7・6cm、幅6・3cmの「鉸具造立轡環状鏡板付轡」で、引手と衡は遊環を介して連結する方式である。引手は破片しか残っていないが、先端部を曲げない「直引手」だったと思われる。TK209型式期のものである。

草場6号墳（加藤1992） 福岡市西区下山門字大谷

円墳。横穴式石室から青銅鏡1が出土した。下部床面の腰石付近で矛と共に片付けられたような状況で見つかったという。鏡は面取りをした八角鏡で、直径8・1cm、高さ5cm、鏡の高さ1・6cmを測る。通常二個しかないはずの「型持ち」の穴が四個あるのが特色である。白木原宣氏の御教示によれば、この種の八角鏡は規格性が高く、MT8.5型式～TK4.3型式期に集中してみられるという。

早苗田D-10号墳 福岡市西区大字片江（山崎・井上1981）

直径約1.3mの円墳。横穴式石室から辻金具破片1、飾金具1、衡の破片1が出土した。辻金具は鉄地金銅張で、鉢の部分と脚の一部しか残っていない。鉢部の直径は約3cm、高さは約1cmで全体にかなり偏平である。鉢の肩の部分にわずかに稜がみられ、腹部に凹線などは施さない。TK209型式期以降のものであろう。

飾金具は半円形で表面にニ釦を打つ型式で、残存長2・6cm。やはり鉄地金銅張である。TK209型式期以降の年代が与えられる。衡は鉄製で残存長約7cmを測る。

羽根戸E-2号墳（宮井1989） 福岡市西区大字羽根戸

直径9~9・5mの円墳。横穴式石室から鉸具1が出土した。

羽根戸E-3号墳（宮井1989） 福岡市西区大字羽根戸（Fig. 22）

直径1.2mの円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1が出土した。環状鏡板付轡は素環状で板状の環を鏡板にするもので、環の直径約6cmを測る。手引きと衡は一緒に連結され、引手先端は、ねじ曲げられた形の「蕨手引手」につくる。TK209型式期以降のものである。

羽根戸E-8号墳（宮井1989） 福岡市西区大字羽根戸

円墳。横穴式石室から木芯鉄板張三角錐形壺蓋1組が出土した。馬具は須恵器の壺の内部から破片で見つかったといい、舌状金具、兵庫鎖などが細辯で確認されている。舌状金具は復元長約15cm、最大幅8cmで、残存する鎖の長さなどから見て二連以上の兵庫鎖を連結していた可能性が高い。舌状金具の表面には左右にそれぞれ2鉢を打つ。TK209型式期以降のものである。

羽根戸E-11号墳（浜田・木下1980） 福岡市西区大字羽根戸

直径1.3mの円墳。横穴式石室から木芯鉄板張三角錐形壺蓋の破片、鞍縁金具、鞍1、飾金具1が出土した。馬具は狭道部の軸石の間から見つかった。

木芯鉄板張三角錐形壺蓋の破片は全部で3点ある。1点は残存長約1.1cm、幅2・2cm。鉄地金銅張で表面に同巧の2鉢を打つ。残り2点も残片だが、やはり同じ鏡の一部と考えられる。

鞍の縁金具は鉄地金銅張で長さ2・5cm、幅0・5cm。表面に同巧の鉢3個をやや密に打つ。鞍はT字形の刺金を伴う型式で、板状の脚を不均等にからめて鞍の表面に打ち込む。輪金の最大幅4cm、長さ6・3cm。脚の型式などからTK209型式期を中心とする時期のものと考えられよう。一緒に出土した半球状の金具が、座金具に相当すると思われる。飾金具は菱形で表面に4鉢を打つ鉄地金銅張のもので、横4・8cm、縱4cmを測る。以上のことからこの古墳の馬具には全体としてTK209型式期の年代が考えられる。

羽根戸F-2号墳（浜田・木下1980） 福岡市西区大字羽根戸

直径7m前後の円墳と思われる。横穴式石室から「轡の引手の破片と思われるもの」が出土したといいう。

羽根戸N-8号墳（横山・田中1988） 福岡市西区大字羽根戸（Fig. 24）

円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1、鞍2が出土した。環状鏡板付轡は橢円形の素環状鏡板に単

連の兵庫鎖を取り付けた型式で、鏡板は縦7・3cm、横8・4cmを測る。さびがひどくよく分からぬが、引手と銜は鏡板を介さず、一ヵ所で連結されているらしい。単連の兵庫鎖を取り付ける点にやや古い要素がみられるが、全体としてTK209型式期以降のものである。

鞍は輪金の長さ6・6cm、幅4・3cm。座金具は中央が半球にふくらむ鉄地金銅張のもので、周囲を8枚の花弁状につくり、表面に4個の穴をあける。このような座金具をもつ鞍は、福岡県觀音山II-12号墳、福岡県竹並F-22横穴などから出土しており、TK209～TK217型式期の年代を与えることができる。このタイプの鞍はいずれも金属製の礪金具を伴わず、鞍の部分だけが金属製であった可能性が高い。

広石IV-2号墳（山崎ほか編1977） 福岡市西区拾六町字広石

直径9～10・6m前後の円墳。横穴式石室の石室右袖の部分から環状鏡板付轡1が出土した。

環状鏡板付轡は大形の矩形立聞を持つと考えられるものだが、立聞部分を欠いている。鏡板の幅8・2cm、残存高7・4cmを測る。引手と銜は一ヵ所で共通にされており、引手は端を曲げない「直引手」で、長さ16cmを測る。TK209型式期のものと考えられる。

広石IV-1号墳（田崎・小畠1989） 福岡市西区拾六町字広石

直径10m前後の円墳。横穴式石室から引手1と兵庫鎖1が出土した。

引手は先端の引手壺の部分で、残存長4・7cm。端をくの字に曲げるいわゆる「くの字引手」である。このような引手はTK23型式～TK217型式期の長い期間にわたって用いられた。兵庫鎖は二連が確認されているが、うち1点が完形で幅3・5cm、長さ3cm。おそらく環状鏡板付轡に伴うものと考えられ、MT15型式～MT85型式期の年代が与えられよう。

吉武M-N18号墳 福岡市西区大字吉武高木

円墳。横穴式石室と思われる主体部から素環状鏡板付轡1が出土した。共伴遺物として金製の細い耳環や環に四匹の龍を浮き彫りにした龍文環頭大刀などが確認されている。木報告だが、福岡市埋蔵文化財センターで実見の機会をいただいた。

鏡板は鉄製で直径約8cm、ほぼ正円形をなす。はみは二連衝で、両方の「はみ先の輪」と「くくみの輪」との間の部分に45度ずつひねりを加えているのが特徴である。手先は先端を曲げる端部屈曲引手である。

通常の二連衝の場合、一方のはみで「はみ先の輪」と「くくみの輪」の間で鏡を90度ひねり、他方の衝はひねりを加えないという細工を施している。これは「くくみの輪」の連携部分で必然的に直交せざるを得ない衝の方向をはみ先の部分で補正するための処置であるが、本例の場合は双方を45度ずつひねるという技法を用いていることから、一方のみを90度ひねるというよりも先行するか、系統を異にするものといえるだろう。

千賀久氏によれば、このような45度ずつひねりを加える轡は、5世紀代の「鎌轡」などに類例がみられるという。本墳出土例は「鎌轡」ではなく、環状鏡板付轡であり、環状鏡板付轡にこの種の技法を用いたものは、きわめて珍しい。

以上の形状などから、この轡には、環状鏡板付轡としては最古の段階、TK47型式期の年代を与えるのが妥当と考える。龍文環頭大刀などと同様、朝鮮半島から直接持ち込まれ可能性もあり、とすれば、6世紀以降に盛んに用いられる環状鏡板付轡の祖型の一つになった確率が高い。

吉武塚原L-1号墳（二宮・渡辺1980） 福岡市西区吉武字塚原・天神（Fig. 26）

円墳らしい。原報告では単に「1号墳」と記されているが、現在ではし群に分類されているため、この名称を用いる。横穴式石室から環状鏡板付轡の断片と鉄金具と思われるものが銹着した状態で出土した。TK 209型式期以降のものと考えられる。

吉武塚原L-2号墳（二宮・渡辺1980） 福岡市西区吉武字塚原・天神（Fig. 26）

円墳。横穴式石室大型矩形立間環状鏡板付轡1と木芯鉄板張三角錐形壺蓋の破片1が出土した。TK 209型式期のものである。

吉武塚原L-4号墳（二宮・渡辺1980） 福岡市西区吉武字塚原・天神（Fig. 26）

円墳。横穴式石室から轡1、木芯鉄板張三角錐形壺蓋の破片1組が出土した。これらの馬具はまとまった状態で、玄室左手前隅の須恵器の坏蓋の上に載せられていたらしい。

轡は大形の矩形立間を持つ環状鏡板付轡で、幅8・6cm、高さ7・3cm、立間部の高さ1・5cmを測る。引手は一部を欠いているが、残存長10・5cm。先端部を曲げない「直引手」である。木芯鉄板張三角錐形壺蓋の破片は、壺の部分を覆う舌状金具、兵庫鎖、鉄具の三つの部分からなる。復元すると鎖の長さ7・8cm前後の三連の木芯鉄板張三角錐形壺蓋だったと思われる。舌状金具は残存長7cmで表面に2鉤を打つ。栗林氏や斎藤氏の編年には従えば、TK 209型式～TK 217型式期を中心とする時期のものと考えられよう。この他し群からは出土古墳は不明であるが、兵庫鎖の破片1が出土している。

高崎2号墳（酒井ほか1970） 福岡市西区大字拾六町字高崎

報告書によれば、一辺約15mの方墳と思われる。横穴式石室から鉄地金銅張楕円形鏡板付轡1、環状鏡板付轡1、鐘形杏葉4、雲珠1、辻金具8、木芯鉄板張三角錐形壺蓋1が出土した。馬具類は石室左手前隅の部分から一括で出土したらしい。TK 43型式期のものである。

山崎5・6・10号墳（福岡市立歴史資料館1977） 福岡市西区西油山山崎

1974年に大川清氏によって調査が行われたが、未報告のため詳細は不明。10基の古墳からなる群集墳で、5・6・10号墳の3基から馬具が出土したらしい。遺物の所在が分からず、実見できなかった。

夫婦塚1号墳（塙屋1980） 福岡市西区乙石（Fig. 23）

直径20mを超えると思われる円墳。横穴式石室から心葉形杏葉2、飾金具2が出土した。馬具類は漠道部敷石上及び石の間から見つかったらしい。

心葉形杏葉は鉄地金銅張で幅4・2cm、残存高4cm。杏葉としてはかなり小型の部類に属する。縁金の部分しか残っていないが、元はこの下に鉄製の地板があり、これらを重ねた上から金銅板一枚を被せていたらしく。内部の文様は乳状の突起が突き出したような形状で、三葉文杏葉がさらに退化した型式と考えられる。表面に3鉤を打つ。立間部を欠失しているが、鉄地金銅張の紙で繋に装着したのだろう。TK 217型式期以降のものである。

飾金具はやや丸みを帯びた五角形の表面に3鉤を打つもので、こちらも鉄地金銅張である。類例が

少ないが、TK 217型式期のものと考えたい。

夫婦塚2号墳（塩屋1980） 福岡市西区乙石

直径約3.0mの円墳らしい。横穴式石室から飾金具9、鉄具6以上、鞍2、木芯鉄板張三角錐形壺蓋の破片が出土した。石室は擾乱を受けており、馬具はその中から出土している。

飾金具は5種に大別することができる。まず菱形の表面に4鉢を打つもので、これが1点。続いて一部を欠失しているが、半円形の表面に3鉢を打つもので、これらは大小各1点。さらに方形に4鉢を打つもの1点、半円形に2鉢を打つもの3点、方形にたてに2鉢を打つものが2点で、いずれも鉄地金銅張である。いずれも小型でTK 209型式期以降の特徴を備えている。

鞍は輪金の長さ6・2cm、最大幅4・2cm。別造りの板状の脚をからめて、鞍の表面に打ち込むが、先端部を欠く。蓋金具は平面が円形の半球状のもので、このような型式の鞍は年代幅が大きく、島根県上島古墳から福岡県新延大塚古墳まで、MT 8.5型式～TK 217型式期に用いられた。木芯鉄板張三角錐形壺蓋の破片はいずれも壺部につく舌状金具で、うち1点は長さ9・1cmで、表面に2鉢を打つ。このような舌状金具は、おそらく斎藤弘氏のいう「三G式」（斎藤1986）に相当するもので、TK 217型式期のものである可能性が高い。以上のことから考え、夫婦塚2号墳の馬具にはTK 217型式期を中心とする年代を与えるべきだろう。環状鏡板付轡の破片の可能性のある鉄製品も1点出土しており、元来は轡・鞍・鏡などを含めた金銅装馬具の組み合わせであった可能性が高い。

梅林古墳（浜石ほか1991） 福岡市城南区大字梅林

全長約2.7mの前方後円墳。横穴式石室から鉄具4、鞍1、鞍縁金具2、同覆輪2、環状雲珠の脚部2が出土した。鉄具は大型のものと小型のものの2種類がある。鞍は鞍に打ち込んだ輪金の先端部だけが出土した。輪金の上部は残っていないが、全体を一体づくりにし、先端部を打ち込んだ後、横棒をはめ込んで固定する。このような固定の方法はTK 208型式期の岡山県天狗川古墳にはじまって、MT 1.5型式期の兵庫県南田大塚古墳まで用いられた。よってこの馬具の下限はMT 1.5型式期である。

このほか鞍にかかわるものとしては、前輪と後輪のはしの「山」の部分につけた覆輪2点とその内側を縫取った縁金具をあげることができる。一見したところ、両者とも鉄製だが、表面に何か別の金属を被せたような跡もみられ、検討を要する。環状雲珠の脚部は半円形を呈するもので鉄製。表面に3鉢を打つ。このようなタイプの辻金具は福岡県勝浦41号墳や京都府宇治二子山南墳などから出土しており、やや時代がくだるものとして長野県大室196号墳出土例があげられる。よってこの辻金具の初現はTK 208型式期、下限はTK 2.3型式期～MT 1.5型式期に求めるべきであろう。

タカバン塚古墳（吉留ほか1993） 福岡市城南区大字梅林字平原

直径1.6～1.9mの円墳で、主体部は横穴式石室。鉄具の破片1、兵庫鏡片1、環状雲珠ないし轡の破片と思われる鉄片1が出土している。盜洞を受けており、馬具はいずれも主体部の擾乱中から出土した。

鉄具の破片と考えられる金具は、鉄具の角の部分にあたると想定され、長さ約6cmを測る。兵庫鏡片は素環状鏡板付轡の立闇部に連結したと思われるもので、このような巡結式の立闇を持つ轡にはMT 1.5型式期～TK 4.3型式期の年代を与えることができる。

残る1点は断面が薄い長方形をなす環状の金具の一部と思われるもので、このような形状を呈するものとしては「環状雲珠」ないし、板状の素環状鏡板をあげることができる。仮に環状雲珠であるとすればTK 2 3型式期～MT 8 5型式期、素環状鏡板だとすればTK 2 0 9型式期以降の年代が与えられる。

神松寺御陵古墳（1978） 福岡市城南区大字片江

全長2.0mの前方後円墳。横穴式石室から兵庫鎖の破片2と環状鏡板付轡の破片1が出土した。いずれも前室の左奥でまとめて発見された。

兵庫鎖の破片は1点は破片で、全体の形状を復元することができないが、もう1点は長さ8・3cm、最大幅3・2cmを測る。共に木芯鉄板張三角錐形蓋鏡に使われたものである。本例に近い数値を示す兵庫鎖は、栗林誠治氏の編年によれば、四連の鎖をつけた奈良県三里古墳例の3番目と4番目（いずれも銅具側から数えて）、三連の鎖をつけた岡山県中宮1号墳例の2番目などの例があり、MT 8 5型式期にその中心があるという。本墳出土の須恵器類の中にはTK 2 0 9型式期まで下ると思われるものが存在するが、以上のような理由から、この馬具に関しては、MT 8 5型式～TK 4 3型式期という年代を与えておきたい。これらはおそらく神松寺御陵古墳の埋葬でも、おそらく初葬に伴うものではないだろうか。環状鏡板付轡の破片（残存長約4cm）もやや大形のもので、このような年代観と相違しない。

倉瀬戸4号墳（小田ほか1973） 福岡市城南区大字片江字倉瀬戸

直径約1.7mの円墳。横穴式石室から大形矩形立闇環状鏡板付轡1が出土した。現品は所在不明のため、実測できなかったが、報告書所載の実測図によれば、鏡板は立闇を欠くが、幅8cm、高さ6・5cmを測る。TK 2 1 7型式期のものであろう。

倉瀬戸7号墳（小田ほか1973） 福岡市城南区大字片江字倉瀬戸

直径約1.0mの円墳。横穴式石室から素環状鏡板付轡1が出土した。やはり実物を確認できなかつたが、実測図によれば、直径5cmの正円形素環状鏡板をもつ環状鏡板付轡と推定される。図面によれば、伴う引手は長さ1.4cmの二条線引手で端部を幅3cmの引手壺につくる。このような組み合わせは類例がないが、鏡板の大きさが極端に小さくなっていることや、舶載品としてTK 2 0 9型式期以降に盛んに入ってくる轡などにみられる二条線引手を採用していることなどから、やはりTK 2 0 9型式期以降の年代を与えるのが妥当と考える。

三苦京塚1号墳（瀧本1991） 福岡市東区大字三苦字京塚157

推定直径1.3～1.5m、高さ約3～5mの円墳。横穴式石室から轡、引手、鉄製輪燈破片、貝製雲珠2以上、同辻金具破片、鉤金具破片3、宝珠飾1、花形座2、鞍金具覆輪破片1、飾金具1以上が出土した。これらはいずれも玄室から細片の状態で見つかったらしい。

貝製雲珠はいずれも細片で、鉄地金鋼張。鉢部の復元直径は7・3cmで、長さ2・3cmの棘花弁形脚6を均等に配置する。腹部には二段の凹線を施す。鉢の中央部は中空で、この部分に現在はなくなってしまっているが、白色のイモガイがはめ込まれていたものと想定される（宮代1989）。接合の可能な細片からみて、おそらく2点以上の雲珠があったと見るべきであろう。

一方、脚の中央にはいずれも幅0・7cm程の半円形の飾り穴があけられており、金銅製の3紙と

無文の貴金具1本で繋に装着する。このように脚に飾り穴をあける例としては、佐賀県鏡山古墳、山口県山下古墳などの出土例がある。これらの飾り穴は、これらとセットになる杏葉（多くの場合、心葉形杏葉）の立闇の飾り穴に対応する形であけられることが多く、盗掘を受けているものの、おそらく三苦京塚1号墳でも、当初はこのような杏葉を伴っていた可能性が高い。同時に出土した鉤金具の破片3点はこれらの杏葉に使われたものだろう。

辻金具も雲珠と同巧であり、少なくとも2点以上存在したことは確実と思われる。TK209型式期のものである。さらに宝珠飾1と花形座2は、おそらくこの雲珠・辻金具に伴う。宝珠飾は金銅製、花形座は鉄地金銅張だが、貝製雲珠辻金具の場合、中央に宝珠飾や花形座を載せない例が大多数であるだけに、むしろ珍しい例ということができよう。

飾金具はいずれも鉄地金銅張で、半円形でたてに2鍛を打つもの（欠失分含む5点）、五角形に近い形状で表面に2鍛を打つもの（6点）に大別される。このほか半球状雲珠辻金具の脚の破片と思われるものが4点ある。一鍛半円形脚2点と一鍛方形脚2点で、このことから類推すると、方形脚と半円形脚を交互に配置した半球状雲珠であった可能性が高い。こちらはTK217型式期の製品である。以上のことをからみて、三苦京塚1号墳には2組以上の馬具の副葬があったと考えざるを得ない。初葬は出土した須恵器に対応するTK209型式期であり、続くTK217型式期に追葬が行われた可能性が高いと思われる。

猿の塚古墳（柳田ほか1971） 福岡市東区上和白

円墳。横穴式石室から轡1、兵庫鎖1、飾金具1、鞍1、「杏葉と思われるもの」1が出土した。轡は高さ9・6cm、幅7・3cmの岡安光彦氏のいう「瓢形素環状鏡板付轡」で、引手と衡は鏡板を介して別々に連結する。引手は長さ16・5cmで先端部を屈曲させる端部屈曲引手である。兵庫鎖は1点の長さ8・7cm前後を測る3連のもので、先端に舌状金具と鉗具を取り付ける。杏葉と思われる金具は鉄製で幅6・6cm、高さ5・7cm。内側に心葉形の透かしを入れるが、その上部に約1cmの兵庫鎖1点を表面に打ち込む。形などからみて杏葉とするのが妥当と思われるが、このような兵庫鎖を打つものは他に類例がなく、理解に苦しむ。時代としては総合的にみて、TK43型式期～TK209型式期を考えるべきだろう。

高見1号墳（柳田ほか1971） 福岡市東区上和白

墳形不明。横穴式石室から環状鏡板付轡1、鉗具1が、閉塞石下の砾床の間から見つかった。

環状鏡板付轡は大形の矩形立闇を伴うもので、たて6・1cm、幅5・8cmを測る。鏡板に引手の一部がくっついているが、環の一部をねじって飾るという、岡安光彦氏のいう「江田船山型端環装飾」を施す。引手ははしの部分をねじ曲げた、いわゆる「くの字引手」（端部屈曲引手）で長さ12・2cmを測る。TK217型式期以降のものであろう。鉗具は全体を方形につくるもので、長さ6・9cm、幅3・8cm。棒状の鉄棒を刺金としてからめる。

高見2号墳（柳田ほか1971） 福岡市東区上和白

直径7～8mの円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡1が、石室の閉塞石付近から出土したらしい。

環状鏡板付轡は正円形の素環状鏡板を伴う型式で、環の直径5・3cmを測る。TK209型式期のものであろう。

かけ塚山古墳 福岡市東区かけ塚山（福岡市1975）

古墳だが、破壊され墳形など不明。採集資料として鞍の穀金具3、兵庫鎖の破片1、鉄地金銅張鏡板付轡の破片1が出土した。鞍の穀金具は鉄地金銅張で、周囲をやや欠いているが、前輪につけられたものが長さ約17cm、後輪に用いられたものが長さ約20cmを測る。いずれも鉄地金銅張で、穀金具の上からやはり同巧の紙を密に打つ。穀金具の上部にみられる方形の突起については、かなり欠失しているので現状を保っているとは考えがたい。後輪の穀金具の表面には円形で板状の鉄地金銅張の座金具を載せる。鏡板付轡の破片と思われるものは長さ約2cmの鉄地金銅張製品で、おそらく十字文透かしを持つ心葉形鏡板付轡の外側の穀金の一部だと思われる。

柏原A-2号墳（山崎編1986） 福岡市南区柏原字荒谷外（Fig. 27, Fig. 28）

全長30~40mの前方後円墳。横穴式石室から環状鏡板付轡2（仮にaと呼ぶ）、鞍2、木芯鉄板張三角錐形壺鏡2、辻金具2、飾金具7、鉤具2が出土した。これらの馬具は三群に分かれて出土したらしい。まず玄室手前左袖の付近から轡と辻金具が、玄室の左壁側から須恵器の坏などと共に他の馬具類が、右壁側から鏡が見つかったという。

環状鏡板付轡aは梢円形の素環の鏡板を伴うもので、鏡板の幅8~2cm、高さ5~8cm。引手と衡を一カ所で連結し、長さ14~5cmの端部屈曲引手をつける。岡安光彦氏の編年ではTK217型式期に相当する。

環状鏡板付轡bは2点あったはずの鏡板のうち、1点しか見つかっていない。正円形の素環状鏡板で直径5~8cm、環の厚み0~5cmを測る。衡は過剰のねじりを加えた藤手状のもので、1点あたりの長さ7~8cm、環の直径約8cmを測る。引手はひねりを施さない「直引手」で、残存長8~5cm、環の直径は2~4cmである。このような鏡板付轡は他の型式の環状鏡板付轡と同じく、時代が下るに従って環状鏡板の直径が小さくなっていく傾向が認められ、おそらくTK209型式期のものと考えられる。

鞍はいずれもT字形の刺金を持たない型式で、輪金の最大幅4~6cm、屈曲部の幅2~3cm、長さ6~2cmを測る。鞍の脚部は0~9cm程の細長い鉄板で、それを不均等な長さで輪金にからめて、鞍の表面に打ち込んだと考えられる。このように脚を不均等にからめる型式の鞍は、奈良県三里古墳、福岡県新延大塚古墳などから出土しており、TK43~TK217型式期の年代を与えることができる。それぞれ半球状で正円形の座金具を伴う。木芯鉄板張三角錐形壺鏡2点はいずれも、壺部をかたどる舌状金具の一部で、1点は鉄板を上からたたきとめて、補修を施した跡が見られる。残存長5~6cm、最大幅4~2cm。紙は1点しか確認できていないが、TK209型式期~TK217型式期のものであろう。

辻金具は鉄地金銅張で、中央に低い鉢部を持っており、筆者のいう「偏平鉢状辻金具」（宮代1993）に相当する。このような鉢部を持つ辻金具はTK23~TK43型式期に盛んに用いられたが、本例はその中では例外的に、TK209型式期に属する製品と考えられる。鉢部の頂上には直径0~9cmの鉄地金銅張の紙を打つ。脚は半円形脚でやはり鉄地金銅張の3紙で繋に装着した。特筆すべき点は、鉢部頂上の紙の先端が鉢のはるか下まで貫通していることで、おそらく脚部の紙と共に、この辻金具全体を繋に固定する役割を果たしていた。このような例としては、大分県天満古墳（別府大学付属博物館1979）出土例などがあり、TK209型式期に特徴的な要素である。

飾金具は半円形で2紙を持つものと菱形で4紙を打つものに大別されるが、うち3点は細い鉄棒を渦巻き状にねじり、その上部に3紙を打った円形の金具を取り付けた、他に類例をみない形状のもの

である。いずれも非常に小型でTK217型式期以降のものである可能性が高い。

柏原E-1号墳（山崎編1986） 福岡市南区柏原字荒谷外

直径約1.4mの円墳。鉢具2が溝道の後半部分から出土している。鉢具は長さ7・9cm、最大幅5・4cmのかなり大形のもので、棒状の刺金をからめて取り付ける。TK43型式期の年代を考えたい。

柏原H-1号墳（山崎編1986） 福岡市南区柏原字荒谷外

直径約1.2mの円墳。環状鏡板付轡の破片1、木芯鉄板張三角錐形轡蓋の破片1、鉢具1が出土した。いずれも溝道部後半部の右側壁際から見つかっている。

環状鏡板付轡は立闇を鉢具状に造る「鉢具造立闇環状鏡板付轡」だが、立闇の部分しか残っていない。立闇部は推定で幅3・6cm、高さ2・8cm程度と考えられる。これらは岡安光彦氏の指摘する「環状鏡板付轡の規格品」に見られる値と極めて近く、おそらくTK217型式期の年代を考えられるだろう。

木芯鉄板張子形轡蓋の破片は、騎乗者が足を収める轡の部分に用いられる舌状金具である。幅4・3cm、残存長約8cmで、表面に鉄製の2孔を打つ。畜藤暦年のTK217型式期に相当する。鉢具は長さ6・8cm、最大部分の幅4・8cmで、やはりTK209型式～TK217型式期の幅の中で考えるべきものである。

柏原J-1号墳（山崎編1986） 福岡市南区柏原字荒谷外

直径約1.3・5mの円墳。鉢具1が出土した。一部を欠失しているが、幅4・8cm、長さ7・8cmを測る。玄室の床面近くで見つかった。TK43～TK209型式期のものであろう。

老司古墳（山口ほか編1987） 福岡市南区老司

前方後円墳。3つの竪穴系横口式石室から轡の銜5点、鞍の覆輪の破片2、鉢具1が出土している。銜は細い鉄棒2本をあわせて振り、両端に環をつくるもので、大小の3種が認められる。覆輪はいずれも一番先端の部分のみが出土している。

大牟田古墳群 福岡市南区柏原字大牟田（福岡市立歴史資料館1977）（Fig. 24, Fig. 25）

かつて三島格氏らによって1969年から70年にかけて調査が行われた。計43基からなる群集墳といわれるが（佐田茂ほか1971）、本報告で詳細は分からぬ。福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている鉄器類を調査させていただいたところ、1号墳、2号墳、12号墳、14号墳の少なくとも4基から馬具が出土していることが確認された。福岡市教育委員会のご好意により、一部の図面を掲載させていただく。

概略を述べると、1号墳からは大形短形立闇を持つ環状鏡板付轡1が、2号墳からは鞍1、鉄地金銅張の雲珠1、同巧の飾金具1が、12号墳からは素環状鏡板を伴う環状鏡板付轡1が、14号墳からは鉄地金銅張で稜のある半球状の鉢部を持った辻金具5と鞍2、鉄地金銅張の飾金具1がそれぞれ出土している。詳細は別稿に譲るが、時期的にはそれぞれTK43型式期（1号墳）、TK209型式期（2号墳）、TK209型式期（12号墳）、TK217型式期（14号墳）の年代が考えられよう。中でも12号墳から出土している轡は鏡板の断面を板状につくり、歯手状の引手を伴う型式で、佐賀県

などにも類例が多くみられる。

分析—福岡市出土の馬具をめぐって—

以上、福岡市からは出土古墳がわからないものも含めて、約50の古墳から馬具の出土が確認された。これらの多くは盗掘を受けたり、二次的な移動を受けた状態で出土しており、当然のことながら元々の馬具の組合せを復元するには、困難が伴う。

しかしそれを承知で、あえて分析を試みるならば、上記の48基から出土した馬具のうち、轡をともなうのは35であり、このうち環状鏡板付轡を伴うものが20とその大半を占める。一方足を収める轡を出した古墳は8基であり、このうち6基では環状鏡板付轡と三角錐形壺蓋の組合せが確認された。

いわゆる金銅装馬具との関連でいうと、明らかに鉄製以外の轡が伴うと考えられたのは、「I字形鏡板付轡を伴った可能性のある高崎2号墳と、十字文心葉形鏡板付轡を伴ったと考えられる、かけ塚山古墳のみで、あとは環状鏡板付轡を伴うか、引手などの破片しかなく、型式が特定できなかったものばかりである。鉄地金銅張の馬具としては、前述の高崎2号墳で鐘形杏葉と鉢状雲珠辻金具が、かけ塚山古墳で鞍金具が、夫婦塚1号古墳で心葉形杏葉が、梅林古墳で鞍覆輪が、大牟田2号墳と14号墳で鉢状雲珠辻金具がそれぞれ確認されているが、それ以外はほとんどが繁に伴ういわゆる「飾金具」である。環状鏡板付轡と辻金具という組合せも8例で確認された。

福岡市域の古墳には、馬具の追葬はほとんど見られない。確認されたのは、「I字形鏡板付轡に環状鏡板付轡が伴った高崎2号墳と、環状鏡板付轡が出土した柏原A2号墳の2例のみで、そのほかの古墳では、基本的に馬具1セットのみの副葬であった。

やや変わった副葬の例として、羽根戸E-8号墳から出土した轡をあげることができる。この轡は須恵器の杯に6点の破片になった状態で見つかっており、当初からばらばらに碎かれて供えられた可能性が高い。このような遺物を使用不能な状態にしてから副葬する例は刀剣を曲げて供える例などとしても確認できる。本墳の場合も同様の思考が働いている可能性が高いのではないか。なおやはり馬具を破壊して副葬した可能性があるものとして、「I字形鏡板付轡の引手と引手壺の部分だけが離れた形で須恵器の中から出土した、同じ福岡県の番塚古墳をあげることができる。いずれも須恵器の杯を用いているのが特徴である。

時期について考えると、5世紀代の老司古墳は別格として、大半が6世紀に入ってから副葬されたものということができる。古手の一群としてはTK47型式期の梅林古墳、MT15型式期の新立表2号墳などがあげられるだけで、それ以外はすべてTK43型式以降、中でもTK209型式期に入ってからのものが圧倒的に多い。筆者は現在福岡県全体の馬具の集成を進めているが、このような傾向は全県的なものといえる。

地域的な特性を示している馬具としては、板状の断面形を持つ素環状鏡付轡をあげることができる。福岡市内でいうと、羽根戸E-3号墳、柏原A-2号墳、佐賀県の大工田S T002、勇猛山8号墳などから出土しており、福岡県、佐賀県の馬具の一つの特徴を示すものと考えられる。これらは藤手状の引手を伴うことが多く、鏡板のつくりも一つの轡の部分によってかなりの差が見られるなど、全体につくりが悪く、鏡板の大きさが6cm内外のものが多い。詳しくは別稿にゆずるが、このような馬具は福岡県内でも他に10例以上が確認されており、鐵錠などと同様、馬具の地域生産が行われていたことを示す証左と考えられる。

もう一つ特徴的な馬具の一つとして、鉄製梢円形鏡板付轡をあげることができる。この種の轡は埼

玉県、奈良県、福井県、愛媛県などに見られるようにその出土地が集中する傾向がみられ、福岡県での出土は釣崎3号墳、女山7号墳、同8号墳について、新立表2号墳で4例目を数えた。

これらのことを考えた上で、飯氏二塚古墳の馬具についてもう一度考えてみよう。飯氏二塚古墳出土の馬具には、すでに述べたようにMT15型式の年代を与えることができ、これは福岡市から出土した馬具類の中では比較的古い一群として位置づけられる。このような環状雲珠辻金具を出土した古墳としては、県内では勝浦41号墳や番塚古墳、県外では東京都亀塚古墳、茨城県三昧冢古墳、京都府物集女車塚、兵庫県西宮古墳などがある。いずれも鉄地金銅装の馬具を出土した古墳であり、鎧、轡（中でも「字形鏡板付轡」）などの馬具が揃って確認された。飯氏二塚古墳の馬具が壺掘を受けているのか、それともすでに述べたように、埴輪時このような組み合わせを意識して供えられたのかという疑問は残るが、いずれにせよ、当初はこのような優品の馬具と組み合わされて用いられてた可能性が高い。

この項の執筆にあたっては、小田富士雄先生、西谷正先生をはじめ、折尾学、小畠弘己、内山敏行、下村智、杉山富雄、瀬瀬芳之、谷畑美帆、中國聰、中村享史、二宮忠司、本田光子、宮小路賀宏、柳田純孝、横田義章、古留秀敷の諸氏からさまざまご教示をいただいた。中でも福岡市埋蔵文化財センター及び九州歴史資料館の方々には、資料の実見にあたって直接ご迷惑をおかけした。さらに常松幹雄氏には貴重な報告書の場をお借りして、つたない文章を掲載する機会をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。今回掲載できなかった所見については、近いうちに発表の機会をてくれれば、と考えている。

文 献

- 大庭康時・力武卓治 1985 『丸尾古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書114集 福岡市教育委員会
- 大庭康時・力武卓治 1990 『席田遺跡群IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書218集 福岡市教育委員会
- 岡安光彦 1884 「いわゆる『素環の轡』について—環状鐵板付轡の型式学的分析と編年」『日本古代文化研究』創刊号
- 小田富士雄ほか 1973 『倉瀬戸古墳群』 倉瀬戸古墳群調査団
- 加藤良彦 1992 『草場古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第301集 福岡市教育委員会
- 蒲原宏行 1980 「猿獄A遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』4 佐賀県教育委員会
- 栗林誠治 1992 「柴又八幡神社境内古墳出土の馬具について—出土馬具の年代」『柴又八幡神社境内古墳』 葛飾区郷土と天文の博物館
- 斎藤弘 1986 「古墳時代產造の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号
- 酒井仁夫ほか 1970 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡市拾六町所在の遺跡群第1集 福岡県教育委員会
- 佐田茂ほか 1971 『大牟田15号・43号墳発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 塙屋勝利 1980 『福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書(3)・夫婦塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書51集 福岡市教育委員会
- 杉戸町教育委員会 1981 『日沼8, 9号墳』 埼玉県杉戸町文化財調査報告書第3集
- 花園町黒田古墳群調査会 1975 『黒田古墳群』
- 濱石哲也・菅波正人・林田憲三 1991 『梅林古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集 福岡市教育委員会
- 福岡市 1971 『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集 福岡市教育委員会
- 福岡市 1975 『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集 福岡市教育委員会
- 福岡市立歴史資料館 1977 『福岡平野の歴史—緊急発掘された遺跡と遺物・原始時代～江戸時代』福岡市立歴史資料館図録第2集
- 下條信行・定森秀夫・藤尾慎一郎 1984 『福岡市早良区重留A群第1号墳』 古代学協会
- 瀧本正志 1991 『三苦京塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第243集 福岡市教育委員会
- 田崎博之・小畠弘己 1989 『広右遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第195集 福岡市教育委員会
- 二宮忠司・渡辺和子 1980 『吉武塚原古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 福岡市教育委員会
- 濱石哲也 1994 『山崎古墳群—第2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第380集 福岡市教育委員会
- 浜田信也・木下修 1980 『羽根戸古墳群』福岡県文化財調査報告書第57集 福岡県教育委員会
- 宮井善朗 1989 『羽根戸古墳群—西区西部公園建設に伴う調査報告書(2)』福岡市埋蔵文化財

調査報告書第198集 福岡市教育委員会

宮代栄一 1989 「いわゆる貝製雲珠について」『鞍台史学』

宮代栄一 1993 「5・6世紀における馬具の『セット』について」『九州考古学』第68号

宮代栄一 1993 「中央部に鉢を持つ雲珠・辻金具について」『墳丘考古』第30号

山口謙治・吉留秀敏・渡辺芳郎編 1989 『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集
福岡市教育委員会

柳田康雄編 1978 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第5集 福岡県教育委員会

柳田純孝ほか 1971 『福岡市と白遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集 福岡市教育委員会

山崎龍雄・井沢洋一 1981 『福岡市西区早苗田D群10号墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第67集 福岡市教育委員会

山崎純男・柳沢一男・濱石哲也編 1977 『福岡市広石遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977 福岡市教育委員会

吉留秀敏・宮代栄一・岡田文男 1993 『タカバシ塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第335集 福岡市教育委員会

山崎純男編 1986 『福岡市柏原遺跡群II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集 福岡市教育委員会

山崎純男ほか 1978 『福岡市神松寺遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 福岡市教育委員会

横山邦緯・田中寿大 1988 『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 福岡市教育委員会

吉留秀敏 1987 『堤ヶ浦古墳群発掘調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集 福岡市教育委員会

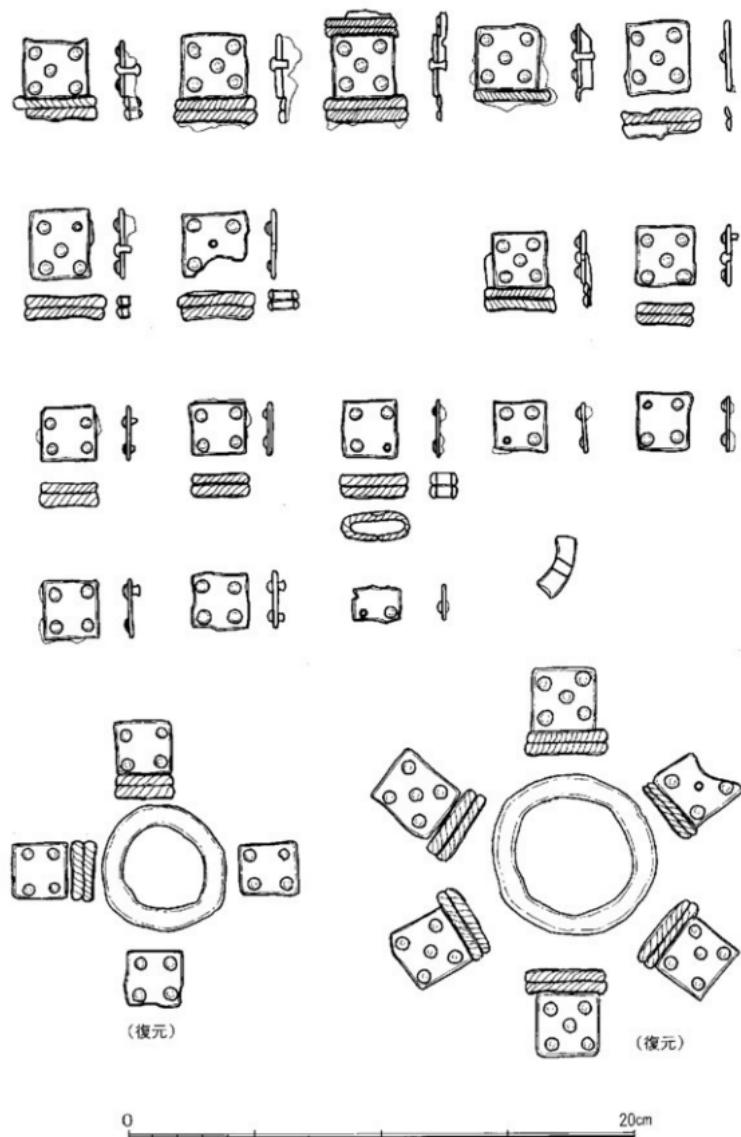


Fig. 21 飯氏二塚古墳 (縮尺1/2)

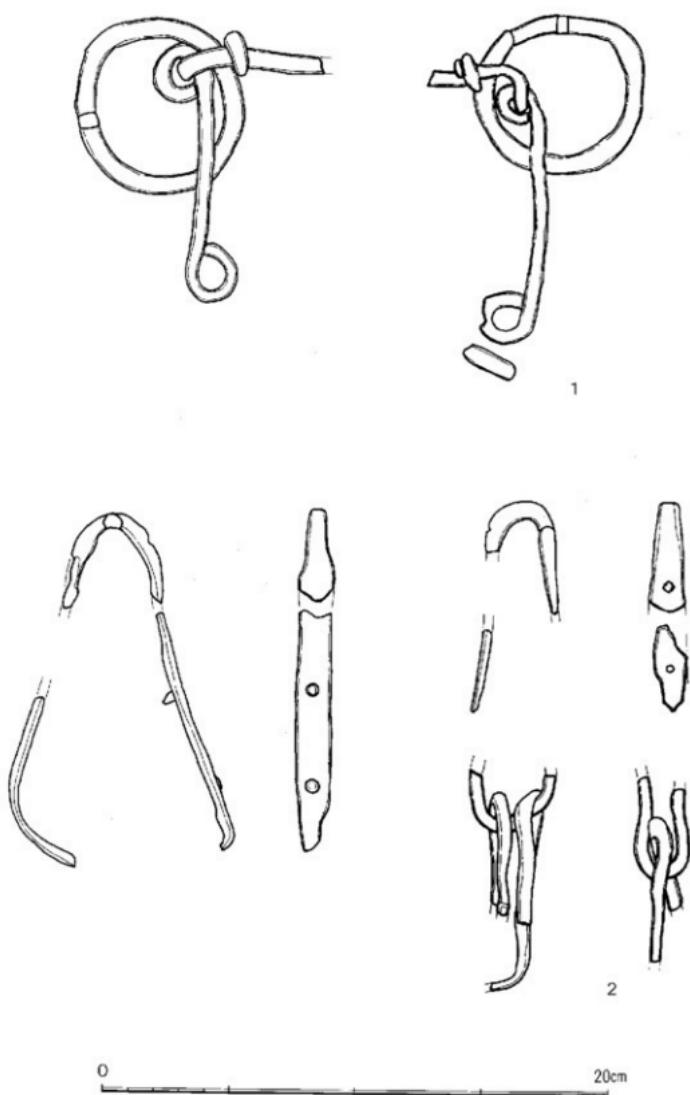


Fig. 22 1. 羽根戸E 3号墳、2. 羽根戸E 8号墳 (縮尺1/2)

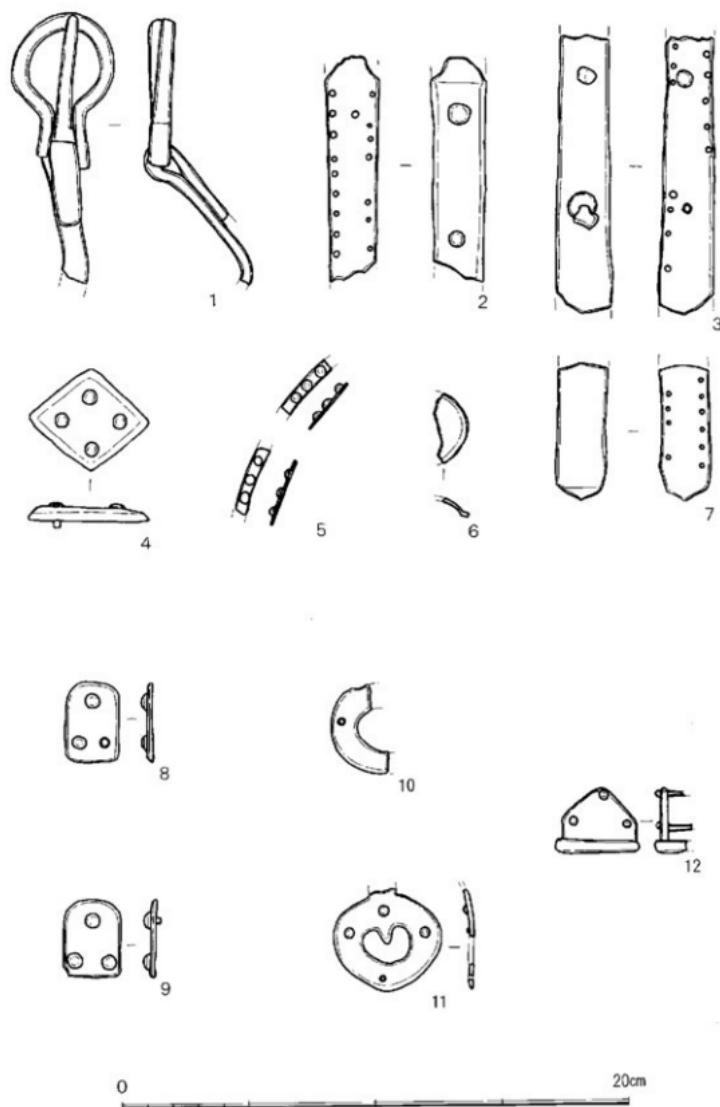


Fig. 23 1～9 羽根戸E11号墳、10・11・12 夫婦塚1号墳（縮尺1/2）

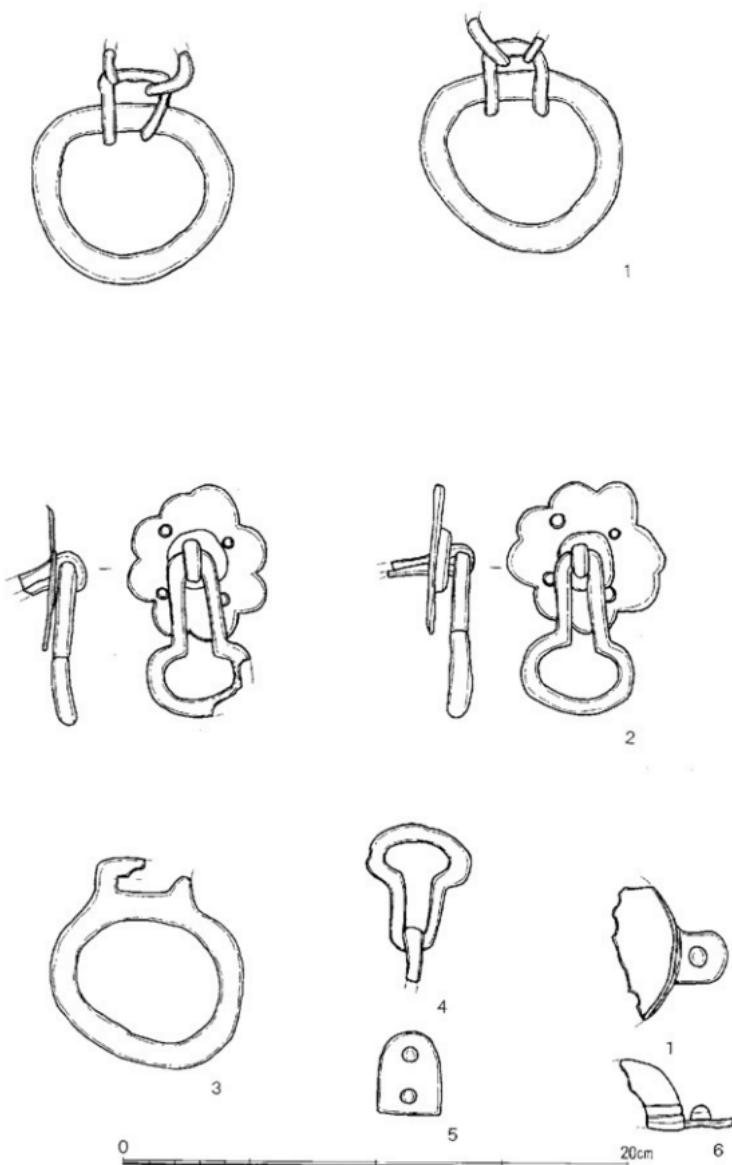


Fig. 24 1・2. 羽根戸N8号墳、3. 大牟田1号墳、4・5・6. 大牟田2号墳(縮尺1/2)

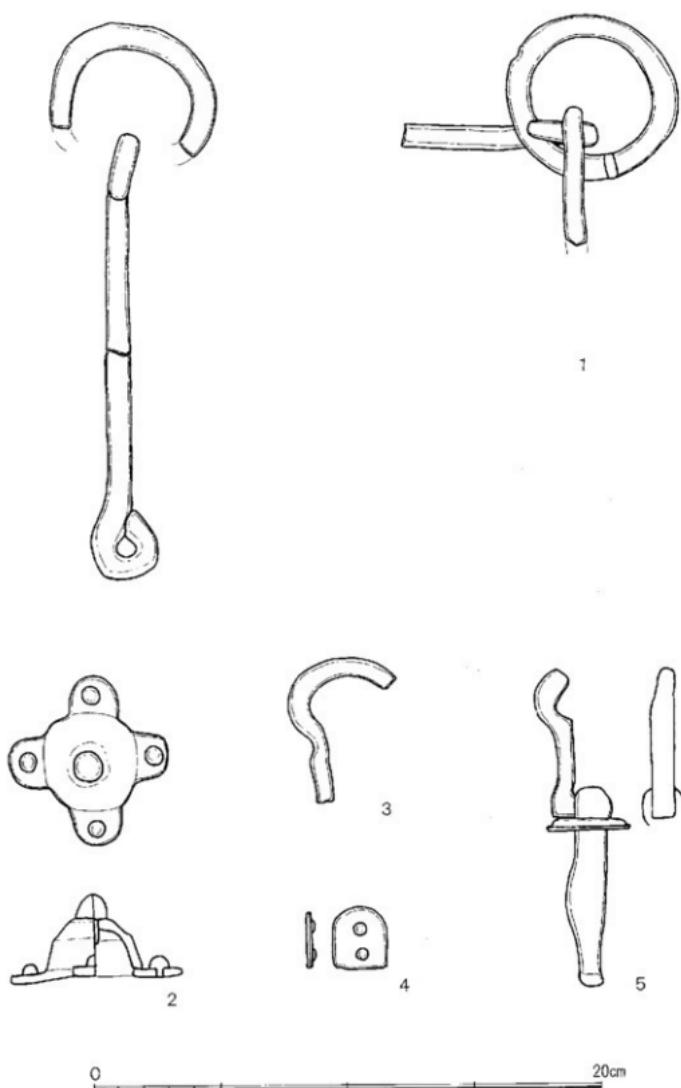


Fig. 25 1. 大牟田12号墳、2・3・4・5. 大牟田14号墳 (縮尺1/2)

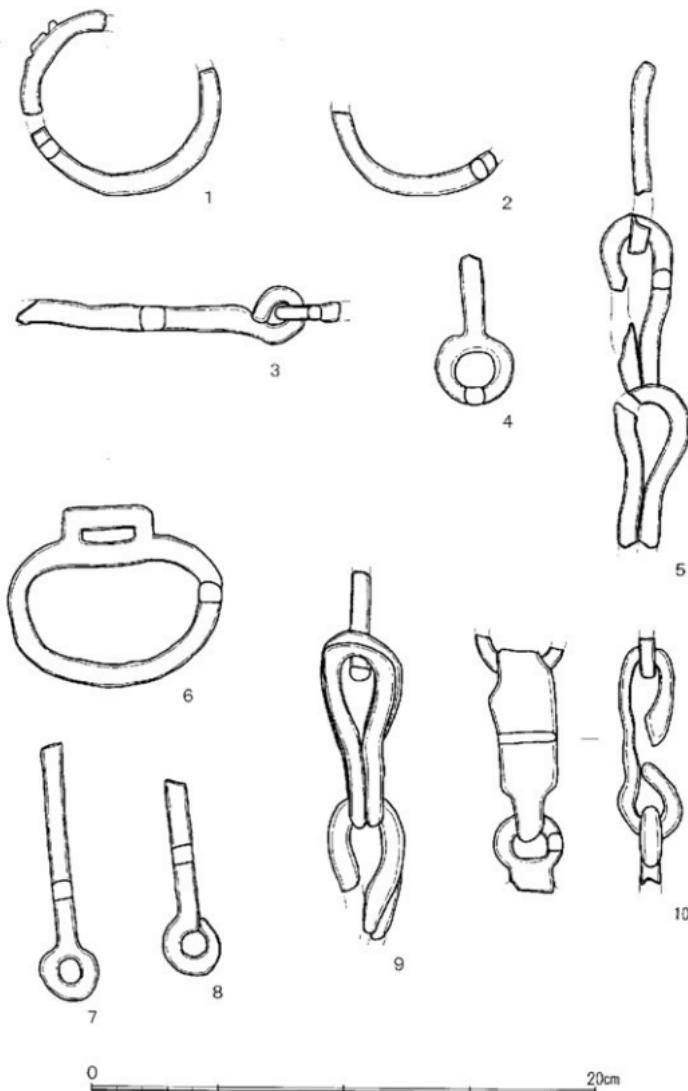


Fig. 26 1~4. 吉武塚原L-2号墳、5. L群出土古墳不明
6~9. 吉武塚原L-4号墳、10. 吉武塚原L-1号墳（縮尺1/2）

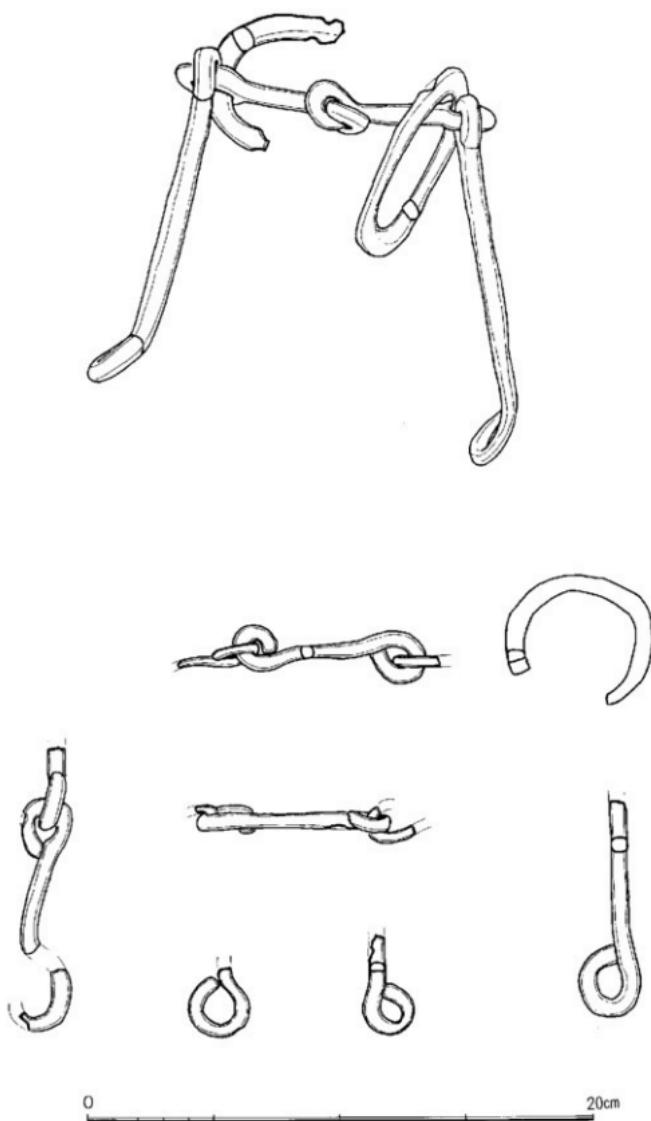


Fig. 27 柏原A 2号墳（縮尺1／2）

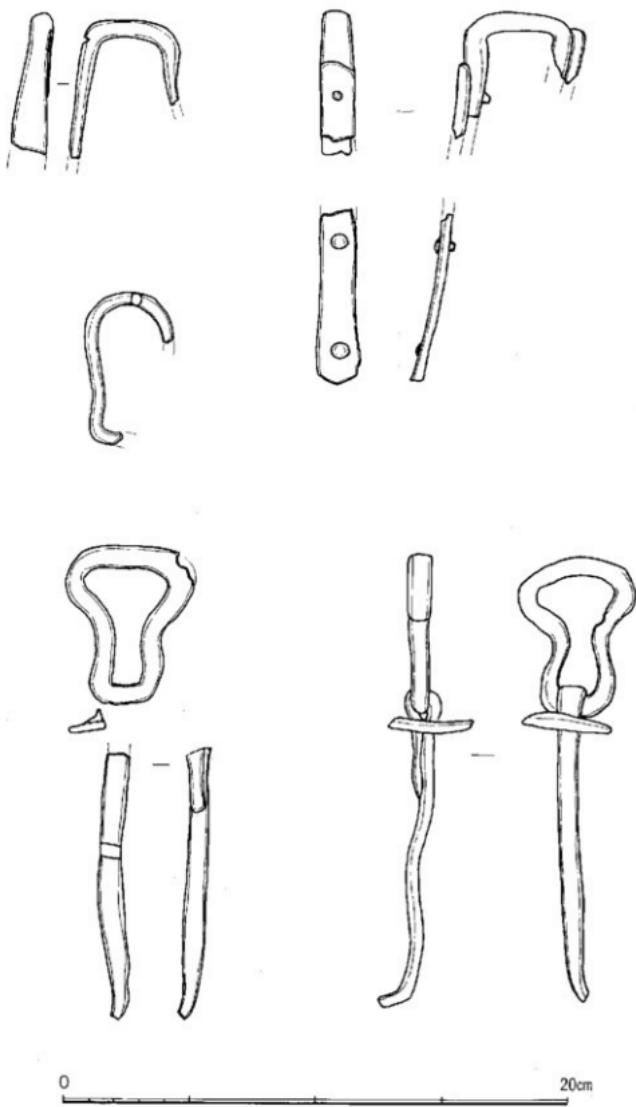


Fig. 28 柏原A 2号墳（縮尺1／2）

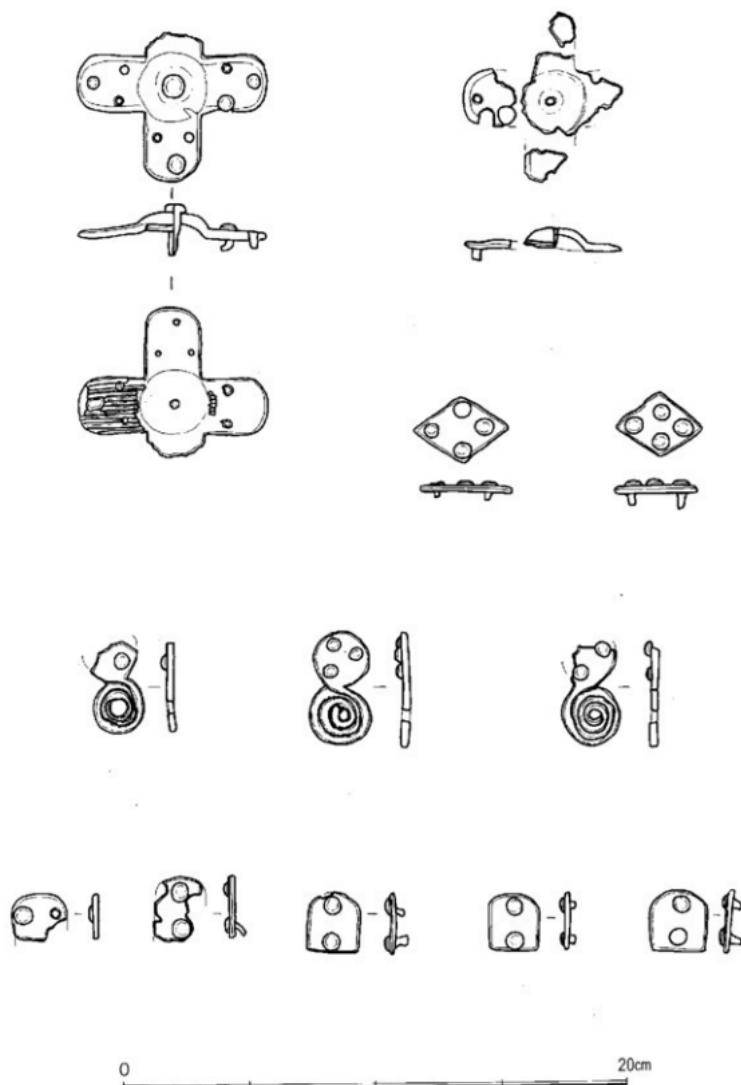


Fig. 29 柏原A-2号墳 (縮尺1/2)

飯氏二塚古墳出土の須恵器の 蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1)はじめに

九州北部地域の5世紀代の古墳から出土する初期須恵器は大阪陶邑産のものと、地元、朝倉群産のものが多いことがこれまでの胎土分析によって示されている。意外なのは、距離的に近い朝鮮半島産の陶質土器が少ないことである。

胎土分析の研究はこれまで、窯跡出土須恵器を中心にして進められて来た。しかし、伝播・流通の様相をさらに詳しく検討するためには、供給先の古墳出土須恵器の胎土分析を強力に推進することが必要である。このような視点から、今回、福岡市のクエゾノ遺跡と飯氏二塚古墳から出土した初期須恵器の蛍光X線分析が行われることになった。本報告では飯氏二塚古墳出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

2)分析方法

土器試料の処理法、測定法、データ処理法はすべて、従来通りである。

3)分析結果

表1には分析値がまとめられている。すべての分析値は同時に測定された岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化された値で示されている。このように、標準化法をとるのは、微量元素Rb、Srを主成分元素K、Caとほぼ同格にして統計式へ代入できるためである。もし、主成分元素を%で、微量元素をppmで表示すると、分析値は2桁は異なり、同格で取扱うことができない。

本研究は本来、多変量解析法を導入してデータ解析を行うのであるが、本報告ではわかり易く説明するという点を考慮に入れ、定性的ではあるが、分布図上でデータ解析を行うことにした。

図1にはRb-Sr分布図を示す。クエゾノ遺跡の場合と同様、試料は大きく2群に分かれることがわかる。そして、一方は陶邑領域に、他方は牛頭領域に対応することがわかる。

図2にはK-Ca分布図を示す。この図でも、No.22は牛頭領域に対応するが、残りの試料は陶邑領域に対応し、それぞれ、前者はクエゾノ遺跡のB群に、後者はA群に対応することもわかる。この結果は図3のNa因子でも確かめられる。

以上の結果、013以外の8点の須恵器は陶邑産、013の1点のみが牛頭産と推定された。

クエゾノ遺跡と飯氏二塚古墳の須恵器胎土は陶邑的なものと牛頭的なものの2種類で大部分を構成するという点で、両遺跡は共通点をもつ。しかし、その内容を点検すると、クエゾノ遺跡の方に牛頭的胎土をもつものが多く、逆に、飯氏二塚古墳の方は陶邑的な胎土が多いという相異が認められる。さらに、クエゾノ遺跡の中でも、1号墳にとりわけ、牛頭的胎土をもつものが多い点が興味をひく。このことは考古学的に如何なる意味をもつであろうか?

Table 2 飯氏二塚古墳分析値

	直色灰青竹刷	0.457	6.098	2.77	0.719	0.272	0.121	A
003	大ガマ	0.325	0.032	2.65	0.408	0.173	0.099	A
017	高坂フタ	0.320	0.134	2.47	0.381	0.329	0.114	A
008	高坂	0.367	0.110	2.51	0.561	0.306	0.108	A
014	高坂	0.307	0.090	2.11	0.392	0.268	0.094	A
014	高坂	0.307	0.090	2.11	0.392	0.268	0.094	A
013	高坂フタ	0.364	0.122	2.38	0.552	0.333	0.116	A
016	大口縁	0.506	0.396	2.11	0.479	0.685	0.305	B
005	高坂	0.376	0.059	2.47	0.427	0.257	0.134	A
001	高坂フタ	0.415	0.110	3.20	0.642	0.272	0.144	A

図1 Rb-Sr分布図

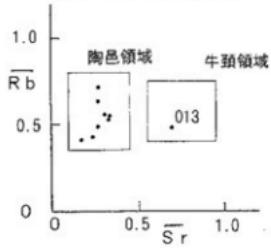


図2 K-Ca分布図

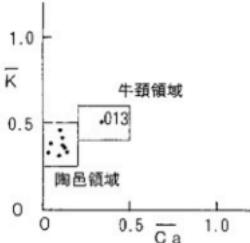
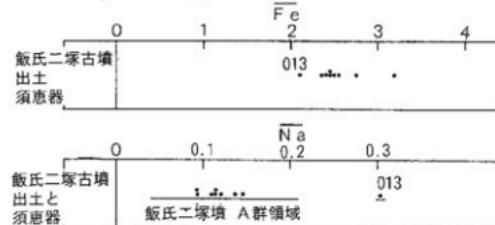


図3 Fe、Na因子の比較



付篇・クエゾノ遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻利一

1)はじめに

須恵器の産地推定は元素分析のデータを使って、遺跡出土須恵器を窯跡（生産地）へ結びつけることによって行われる。そのためには前以って、生産地側の窯跡出土須恵器の化学特性を把握しておかなければならない。こうした考え方で、生産地側の遺物の元素分析から作業ははじめられた。その結果、K、Ca、Rb、Sr因子を中心に地域差があることが見つけられた。例えば、九州北部地域でも、朝倉窯群の初期須恵器と佐賀市の神竈池窯、福岡市の新貝窯の初期須恵器とは相互識別できることがわかった。

他方、供給先の古墳から出土する須恵器の胎土にどの程度の多様性があるのかを知るのも、初期須恵器の伝播・流通を追跡する上には重要なことである。窯跡出土須恵器の分析作業がある程度進行した現在、古墳出土須恵器の胎土分析を強力に推進することが必要になって來た。

このような背景から、クエゾノ遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析を行った。本項はその結果についての報告である。

2)分析方法

須恵器片試料はすべて、表面を研磨して灰釉等の付着物を除去したのち、タンクステンカーバイド製乳鉢の中で100 メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は測定条件を一定に整えるため、塩化ビニール製リングを枠にして、13トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの範剤試料を作成し、蛍光X線分析を行った。

蛍光X線分析には波長分散型の自動分析装置（理学電機製3270型機）が使用された。この装置には48個の試料が同時に装填できる自動試料交換機が連結されている。48個の試料のうち一つは必ず、

岩石標準試料 J G - 1 である。J G - 1 は定量分析のための標準試料であるとともに、自動分析が定常状態で進行したかどうかをチェックするモニターとしての役割も併せもつ。そのため、分析値は J G - 1 の各元素の蛍光X線強度を使って標準化された値で表示された。

データ解析には本来、多変量解析法を使用するのであるが、わかり易く説明するため、定性的ではあるが、分布図を使ってデータ解説を行った。

3) 分析結果

分析値は表1にまとめられている。すべての分析値は J G - 1 による標準化値である。もし、%や ppmなどの濃度表示が必要なときは地質調査所が報告している J G - 1 の分析値を表1の標準化値に乗すればよい。J G - 1 の報告値は K_2O として 3.95%、 CaO として 2.18%、 $Fe_{2}O_3$ として 2.02%、 Na_2O として 3.39% であり、 Rb は 180 ppm、 Sr は 181 ppm である。

次に、表1のデータを使い、分布図を作成した結果について説明する。

図1には $Rb - Sr$ 分布図を示す。この分布図は全国各地の須恵器の地域差を有効に示す分布図として知られる。図1には多数の大坂陶邑窯群と牛頭窯群の須恵器の分析値を包含するようにして描いた大阪陶邑領域と牛頭領域を示してある。もし、ケゾノ遺跡出土の須恵器が大阪陶邑窯群産であれば、陶邑領域に分布しなければならないし、また、もし、牛頭窯群産があれば、牛頭領域に分布しなければならない。図1をみると、P-10、12、13、14、16、17の6点が大阪陶邑領域に分布し、また、P-1、2、4、5、6、9、15の7点が牛頭領域に分布することがわかる。そして、P-3とP-11は陶邑領域にも、牛頭領域にも分布しないことがわかる。この結果、P-10、12、13、14、16、17の5点は陶邑窯の可能性があり、P-1、2、4、5、6、9、15の7点は牛頭窯群の可能性があることになる。そして、この可能性を確認するためには、他の因子についても、それぞれ、両領域に対応しなければならない。

図2には $K - Ca$ 分布図を示す。この図でも P-3、11の2点を除くと、他の試料はクラスター分析をするまでもなく、A群 (P-10, 12, 13, 14, 16, 17) と B群 (P-1, 2, 4, 5, 6, 9, 15) の2群に分類できることがわかる。そして、A群は $K - Ca$ 分布図でも陶邑領域に対応し、B群は牛頭領域に対応することがわかる。この結果、ケゾノ遺跡から出土した須恵器の胎土は大きくは A、B群の2群に分類され、前者は搬入品であり、後者は地元産の須恵器であることがわかる。P-3と11の須恵器の胎土は $Rb - Sr$ 分布図では類似しているように見えるが、 $K - Ca$ 分布図ではかなり離れて分布しており、胎土は互いに異質のものであることがわかる。

図3には、 Fe 、 Na 因子が比較されている。 Fe 因子は A、B群の分類には無関係であることを示している。つまり、 Fe 因子は陶邑群か牛頭群かを識別することができないことを示している。これに対して、 Na 因子は明らかに A群と B群に分かれれる。そして、P-3とP-11は Na 因子では A群に分類されることがわかる。しかし、K、Ca、Rb、Srの4因子では A群には帰属しない。

以上の結果、A群の須恵器は大阪陶邑産、B群の須恵器は牛頭窯群産の可能性が高いことが判明した。なお、これまでのところ、新しい時期のものも含めて、大阪陶邑窯の須恵器胎土と類似した化学特性をもつ須恵器を生産した窯跡は九州北部地域には見つけられていない。

P-11は2号墳岡塚から出土した大甕で、型式的には陶質土器の可能性があるといわれるものであるが、Ca量が多く、データ解析の結果で大阪陶邑窯ではない。朝倉群窯でもない。もし、陶質土器であるとすると、蓮山洞古墳群などの釜山市付近の陶質土器の胎土に類似する。

4) 文献

1) 三辻利一、「古代土器の产地推定法」ニューサイエンス (1983)

2) A, Ando et al, '1986 Values for 15 GSJ Rock Reference Samples, Igneous Rock Series', Geostandards Newsletter, vol.11, P159 (1987)

分析に用いた試料は下記文献に掲載されているので参考されたい。

福岡市教育委員会「クエゾノ遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第420集』(1995)

図4 Rb-Sr分布図

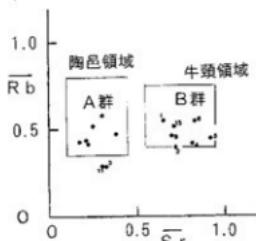


図5 K-Ca分布図

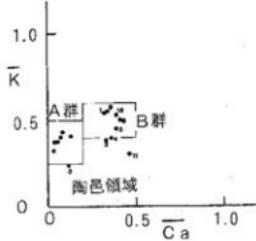


図6 Fe、Na因子の比較

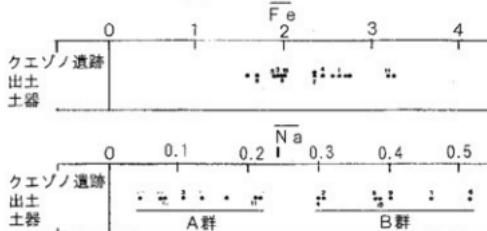


Table 3 クエゾノ遺跡分析値

整理番号	報告書番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類	
クエゾノ遺跡 1号墳	ツボ	112	0.550	0.316	2.63	0.545	0.645	0.463	B
クエゾノ遺跡 2号墳	カメ	104	0.386	0.326	2.36	0.403	0.721	0.305	B
クエゾノ遺跡 3号墳	カメ	108	0.242	0.118	1.94	0.294	0.323	0.107	本分類
クエゾノ遺跡 4号墳	カメ	105	0.398	0.360	2.47	0.417	0.812	0.296	B
クエゾノ遺跡 5号墳	カメ	103	0.463	0.388	1.89	0.451	0.917	0.381	B
クエゾノ遺跡 6号墳	ツボ	113	0.506	0.413	1.70	0.551	0.827	0.518	B
2号墳 9	坏身	202	0.561	0.344	1.96	0.470	0.703	0.402	B
2号墳 10	坏フタ	203	0.376	0.033	2.35	0.437	0.207	0.083	A
2号墳 11	大カメ	205	0.313	0.460	3.19	0.282	0.296	0.212	本分類
4号墳 12	ツボ	411	0.439	0.083	1.59	0.581	0.299	0.168	A
4号墳 13	ツボ	409	0.379	0.050	2.55	0.519	0.246	0.135	A
1号土坑 14	ツボ	611	0.407	0.125	2.72	0.477	0.375	0.218	A
1号土坑 15	坏身	608	0.538	0.392	2.00	0.522	0.708	0.386	B
1号土坑 16	坏フタ	606	0.413	0.071	3.26	0.419	0.217	0.080	A
1号土坑 17	坏フタ	602	0.331	0.025	2.75	0.427	0.172	0.045	A

鉄鎌 (Fig. 30 P.L. 24)

玄室床面付近の覆土から検出された。いずれも遺存状況が悪く、先端付近および茎の基部と認められた点について図示する。

201.は、唯一先端部近くと認められるものである。細身式長頸の三角鎌である。先端部と開いた方を左へ。現存長8.8cm、鎌身部幅0.7cmから0.8cmをはかり、基部に向かって幅広くなる傾向がうかがえる。メタルが残っている。

202.203.204.は長頸鎌の基部にあたる。

205.から210.は、いずれも茎の基部にあたる。外面に樹皮あるいは纖維質のものが遺存している。206.のみ纖維質のものが螺旋状に巻かれているのが観察できる。断面形は、方形に近いものや不整円形などがある。

鉄鎌および馬具の保存処理はこれからであり、作業の過程で知見を整理したい。

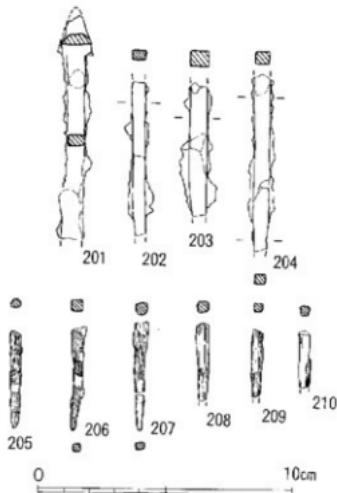


Fig. 30 鉄鎌実測図 (縮尺1/2)

第3章 結 語

本書は、古墳の構造や出土遺物に関する事実報告、馬具についての資料紹介、須恵器の蛍光X線分析から構成される。

さて本書によって、飯氏二塚古墳の全体像が初めてあきらかになった。以下に内容的に注目されるいくつかの問題点を提示してまとめをしたい。

まず二塚古墳の位置する丘陵は、今宿平野から糸島平野へ移行する部分であり、高祖山西麓に分布する古墳群のなかで系譜を整理すべきであろう。

前期の4世紀代に高祖東谷1号墳、5世紀後半に兜塚古墳(94年度現在調査中)、そして飯氏二塚古墳と変遷をたどることができるが、4世紀の終わりから5世紀前半にかけての部分が明らかでない。二塚の北側に試掘調査で確認された前方後円墳があるときくが、今後の調査に課せられる目標も具体化しつつあるようである。

石室の破壊は著しかったが、玄門部の仕切り石の上に長方体の石を配して短い狭道部を形成していくと理解できる。該期の石室の構造として特徴的であり、注目すべき所見である。開口部は主軸に対して垂直方向をとる。

つぎに墳丘出土の須恵器について検討しよう。石室の大部分は後世の破壊により失われていたが、石室内から土器片が全く検出されなかったことは解釈上留意すべき点である。ここでは次ぎにあげる状況が想定される。

- 1.石室内に副葬された須恵器はすべて撤去された。
- 2.石室内に須恵器は入れられておらず、前方部と口縁部の境に置かれていた須恵器がくびれ部に転落した。

この時期の前段階、北部九州の広い範囲では、すでに石室内に須恵器が供献されるようになる。もっとも大壺の法量は閉塞石から復元される差度の幅よりも広いため入れることはできない。

須恵器の型式について、有蓋式高杯は、すべて長脚の一段透しでおさまっており、蓋の口径やカキ目調整などに共通する属性を指摘できる。脚端部のつくりの違いも時期差というよりも器種の多様性のなかで理解できよう。蓋の口縁端部に段を有する、突帯や蓋の稜部の張出しが明瞭かどうか、櫛推波状紋の原体の間隔の粗密などを目安として、各器種は、古相と新相に分類できよう。

古相 101, 102, 103, 104, 116,

新相 106から115, 117

これらを田辺昭三氏の陶邑編年に充てると、II期の最初の段階であるMT-15型式のなかで理解できる。北部九州においてこの段階の須恵器は、小田富士雄氏の編年の中期にあたる。この段階を6世紀初頭とするか前葉と捉えるか微妙な年代観の幅は生じるが、総じて大きな開きは認められない時期である。

今回、三辻氏による蛍光X線による胎土分析では8点の試料が、陶邑領域に対応し、大妻(116)の口縁部1点が牛頭領域に対応するとの結論が出された。有蓋式高杯は全て焼成時に歪みを受けているが、こうした器が一様に陶邑を中心とする流通経路にのせられたものか、分析結果を出発点とする検討も必要であろう(1)。

馬具では、遭存状況の悪い中、環状雲珠辻金具を構成する革金具や鉄環が確認された点は成果であった。福岡市域出土の馬具としては初期の組成である。金属製品については保存処理の過程で再度復元を試みたい。

飯氏二塚古墳の被葬者の性格を、断片的な副葬遺物だけで推し量ることは難しい。だが石室構造や馬具類の解釈によっては、半島との関連を求めるを得まい。須恵器の型式は、およそ6世紀初めに限定でき、造営から埋葬までの期間も極めて限られていたようである。この頃、筑紫國造家と人和朝朝廷との緊張関係は、維体天皇の二十一年(527)に表出する。「磐井の乱」である。二塚古墳の被葬者がどのような役割をになったにせよ、こうした激動の時期を生き抜いた人物に違ひあるまい。

ここ数年実施されてきた今宿平野に面した前方後円墳の調査は、地域的な課題としては、首長墓の変遷を明らかにするという目的があった。また同時に初期横穴式石室など韓半島を含めた文化の導入に視点を向けた、アプローチも強調してきた。今回の事実報告が、さまざまな問題を提起し、内外の文化交流に役立つことを期待したい。

また身近な課題としては、時期の近い前方後円墳である今宿大塚古墳との比較研究があげられる。盾形の周濠があり、埴輪をもつなど、規模、内容ともに飯氏二塚古墳を凌駕するが、出土した須恵器は同型式という(2)。埴丘形態だけをとると、平面形態の比率も近く、飯氏二塚古墳との対比をすすめてみたい。また隣接する自治体との積極的な情報交換ものぞまれる。さいごになったが関係者各位のご理解とご協力に重ねて感謝申し上げるとともに、なお一層のご鞭撻をお願いして結びとする。

註

1. 中村 稔「筑紫における有蓋式脚付壺」『古文化談叢』第33集、九州古文化研究会1994年。文中氏は、型式を検討したうえで、未確認の古窯址の存在を示唆している。
2. 柳沢一男「今宿大塚」『福岡平野の歴史 緊急発掘された遺跡と遺物』、福岡市立歴史資料館、1977年。 前方後円墳集成によれば、外表遺物として須恵器(MT-15)・陶質土器とあるが、遺物は埴輪3点の図版以外公表されていない。仮収蔵のコンテナは、約250箱、折りみて須恵器だけでも再検索したい。

Summary

We have excavated particular ruins for the purpose of recognizing significance of them. Up to now some tomb mounds have been investigated. During 1992 and 1993 campaign, we carried out the survey of Iiji-Futatuka mounded tomb.

This burial mound is located in the plain that spreads over west side of Fukuoka City. The distribution of more than 12 keyhole-shaped mounded tombs have been known there, and Futatuka is one of them. They give us significant information about transition of local kingdom in the Kofun period.

The Mound and Burial Facilities

The survey was begun in February 1993, and at first we made offset planing. After it, we dug up 14 trial trenches by necessity. As a result of the survey, we found some paving stones on the slopes and a stone chamber. There was no Haniwa (unglazed earthenware). We will explain its outline as follows.

The length of burial mound is 48m, and the diameter of a circular mound is 28m, and the square-plan mound is 23m long and 34.5m wide. The direction of axis is about west-east. Some part of the mound was damaged by cultivation or earthen pits.

The altitude of the highest was 34m, and the height of the mound is 5m, and most of it was artificially heaped up. The process of heaping can be divided into 3 stages. First, the mound was fundamentally rammed and the stratum looked like small stripe. Secondarily rammed with blackish or yellowish soil one after another, finally the mound was finished with red-colored soil. In contrast with paving stones, the mound could be seen as the huge monument. It seemed to appeal visually to the people.

Though most of the upper part of the chamber was damaged, we could find the remains of it. It was a corridor-style stone chamber, being made of granite. The entrance of the chamber opens to the south, and an elliptic stone was laid in front of it. By the observation of the order of stones, the chamber was restored as a symmetrically built stone chamber entering in the middle of one end. It measures 2.3m at the entrance and back wall, and 3.5m long. The lined stones partition the main burial chamber and the passageway.

Remains

In the chamber there was no pottery, we just found the pieces of horse trappings, strap unions, round glass beads and iron arrowheads. Especially strap unions with a decorative metal found in Fukuoka region can be regarded as a comparatively early type.

Most of the pottery, Sue ware were found at the narrow waist of a key-hole shaped mound. The shapes of potteries are big pots whose height is more than 1m, a wine server, pedestal bowls with fitted covers, a footed jar with fitted cover. And the types of potteries correspond to the type, MT-15, based on the pottery chronology from the Osaka Suemura kiln site group. They can be dated to the early 6th century A.D.

We got 9 samples of Sue wares investigated by Prof. Mituji. According to X-ray fluorescent analysis, 8 of their data correspond to the range of Suemura kiln sites, and 1 of them cor-

responds to that of Ushikubi kiln sites in Fukuoka. If these results show the producing center, many Sue wares were brought from Kinki district. From an archaeological point of view, as pedestal bowls were twisted, some questions leave room for discussion.

Discussion

Iiji Futatuka can be dated to the early 6th century A.D. At this age funeral rites using pottery within the burial chamber became widespread. In this survey, although most of the main chamber was destroyed, no piece of pottery was found. I wonder why potteries were originally placed within the chamber.

And we should pay attention to the structure of stone chamber. Because the style of it is very characteristic, we have never known examples about it.

Up to now, in Fukuoka region, the material concerning about the early 6th century was comparatively few in number. As the tension between Yamato dynasty and North Kyusyu kingdom was increasing, "the rebellion Iwai" broke out in the Chikushi district, ancient Fukuoka district. The buried person in Iiji Futatuka mounded tomb was thought to be alive at the same period.

The transition of keyhole-shaped mounded tombs implies the growth of power of the local rulers. It is not much to say that they are witnesses of Kofun period. So we make much of every articles excavated there. For the present, we are going to compare with the neighbouring mounded tombs.

At the end of this report, we greatly appreciate advices and aids by many people.

KEYWORDS: the Kofun period, keyhole-shaped mounded tombs, the early 6th century, North Kyushu, a corridor-style stone chamber, horse trappings, strap unions, the pottery, Sue ware

(M.T)

図 版



後円部近景（西より）



前方部近景（西より）



前方部近景（東より）



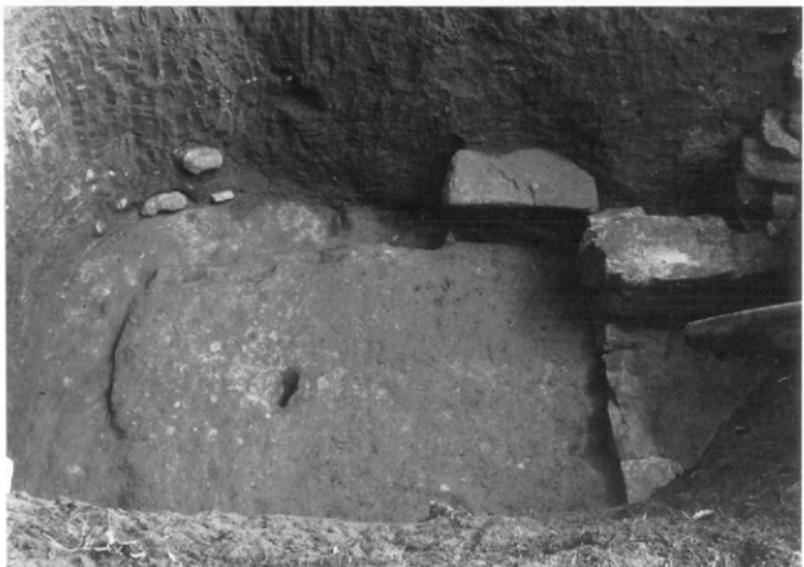
前方部近景（北東より）



玄室（狭道部上面より）



玄室(東より)



玄室(西より)

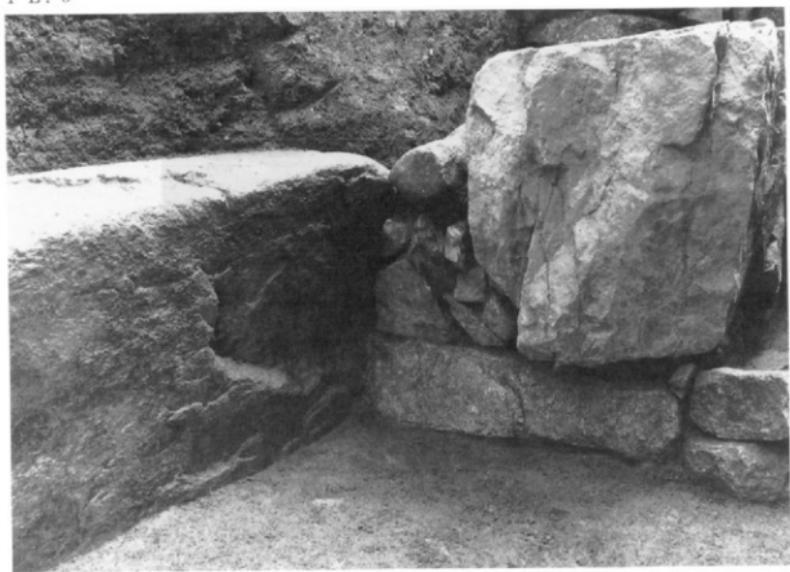


閉塞石〔玄室より〕

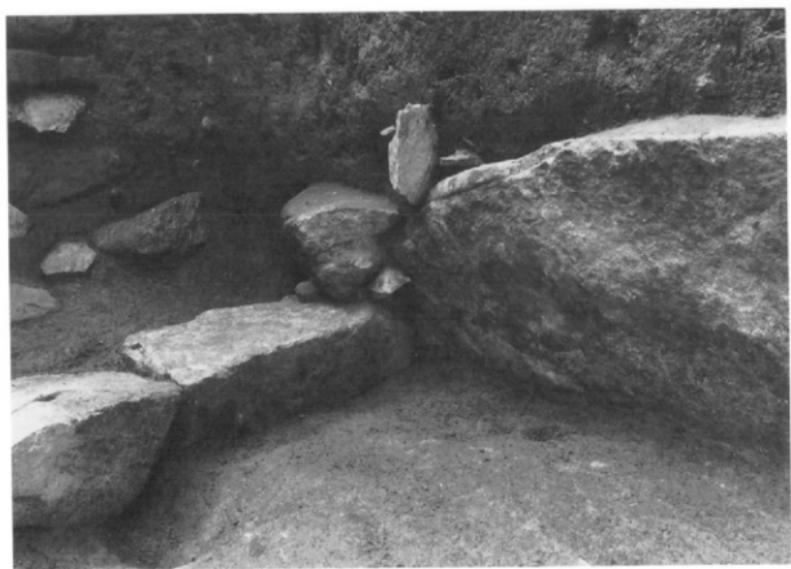


玄門部〔玄室より〕

P L. 6



玄室南東部隅



玄室南西部隅



玄室西側壁



南側くびれ部（第1トレンチ）の掘り下げ（南より）



南側くびれ部（第1トレンチ）葺石検出状況（東より）



南側くびれ部（第1トレンチ）葺石検出状況（南より）



南側くびれ部（第1トレンチ）葺石近景（南より）



前方部北東隅（第9トレンチ）葺石検出状況（西より）



前方部北東隅（第9トレンチ）葺石検出状況（南より）



前方部南西隅（第6トレンチ）墓石検出状況（東より）



前方部南西隅（第6トレンチ）墓石検出状況（西より）



前方部中央部（第7トレンチ）葺石検出状況（東より）



北側くびれ部（第2・4トレンチ）黄石検出状況（北より）



北側くびれ部（第2・4トレンチ）黄石検出状況（南より）

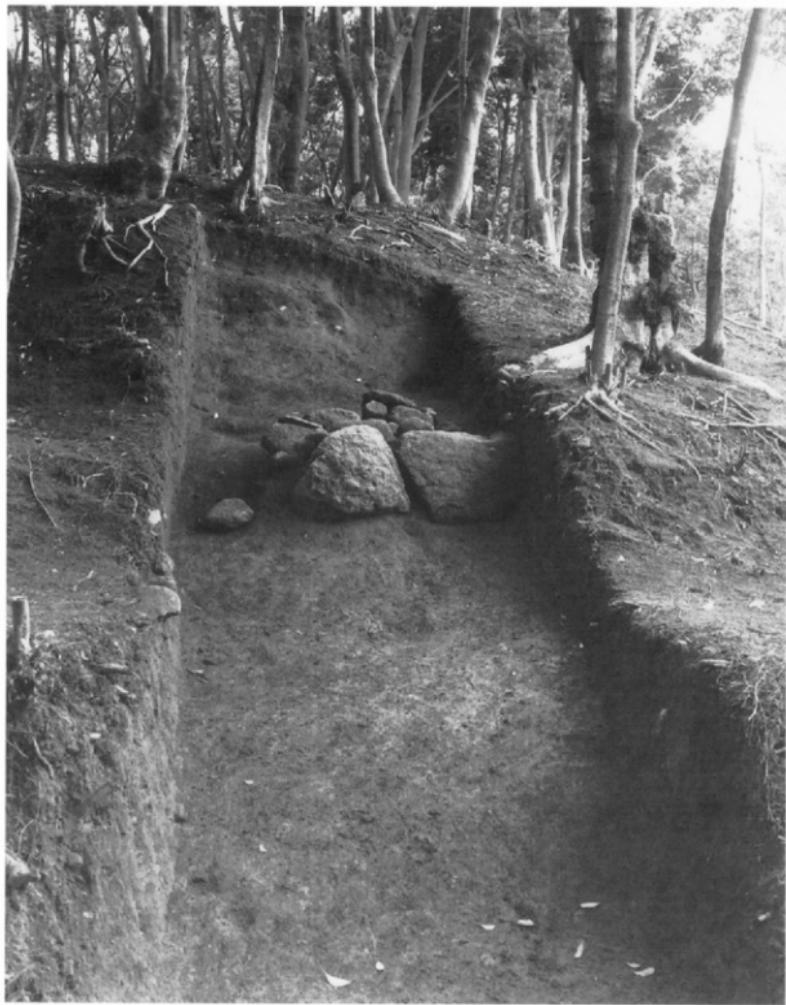
P L. 14



後内部北側（第10トレンチ）葺石検出状況（北より）



後内部南西側（第14トレンチ）葺石検出状況（西より）



後円部西側（第13トレンチ）葺石検出状況（西より）



後内部西側（第11トレンチ）葺石検出状況（西より）



後円部西側（第12トレンチ）の掘り下げ（東より）



後円部西側（第12トレンチ）出土の喪棺（西より）



後円部玄室奥（第15トレンチ）の土層（南より）



前方部南奥壁（第5トレンチ）の土層（南より）



後内部西（第12トレンチ）の土層削ぎ取り作業



南側くびれ部（第1トレンチ） 跡出土状況（南より）



南側くびれ部（第1トレンチ） 有蓋式脚付壺出土状況（南より）



饭氏二塚古墳出土須恵器



◀ 有蓋式脚付壺



▲ 館



◆ 斧口缘



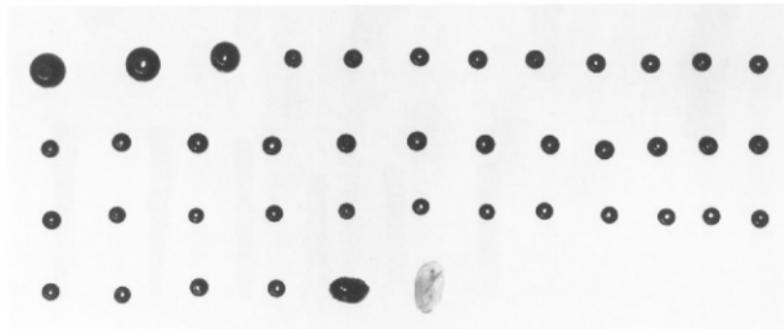
▲ 大 壶



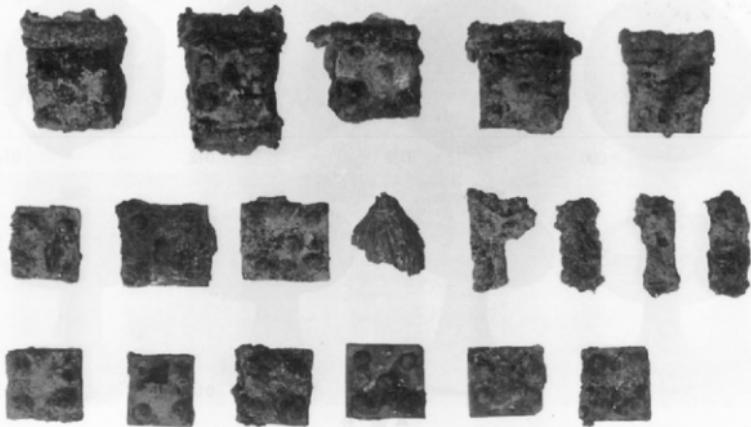
▲ 高 杯



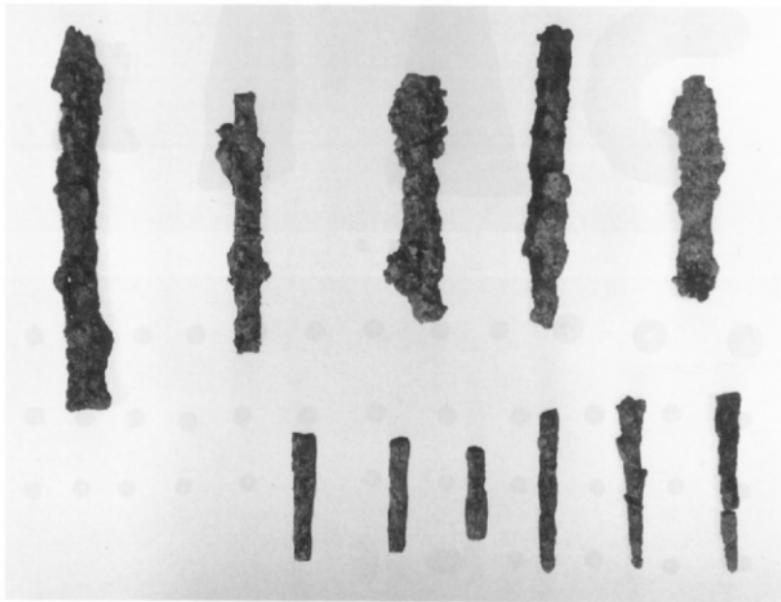
土 製 品



P L. 24



馬具革金具類



鐵 銛

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第435集

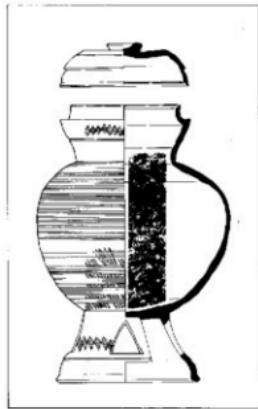
飯氏二塚古墳 1995年3月31日

編集発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課
〒810-0092-711-4667

印刷所：株式会社博多印刷
福岡市博多区須崎町8-5
☎281-0041

IIJI FUTATSUKA KOFUN

Excavation Report of
A Keyhole-shaped Mounded Tomb
in Fukuoka City



March 1995

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

Japan